エドゥアール・シュレー

Edouard Schuré

「エレウシスの聖なる劇」

The Sacred Drama of Eleusis

GA 42

劇化作品集 I

エドゥアール・シュレー戯曲集 1909年

エドゥアール・シュレー再構成
ルドルフ・シュタイナー自由律（自由な韻律）化
全三幕の劇
マリー・フォン・ジーフェルス公認翻訳に基づく

神秘学遊戯団

■エドゥアール・シュレー
「エレウシスの聖なる劇」①
Edouard Schuré
The Sacred Drama of Eleusis
（GA 42　劇化作品集 I
エドゥアール・シュレー戯曲集 1909年）

エドゥアール・シュレー再構成
ルドルフ・シュタイナー自由律（自由な韻律）化
全三幕の劇
マリー・フォン・ジーフェルス公認翻訳に基づく

「エレウシスの秘儀」についてで言及したように、
シュタイナーはエドゥアール・シュレーの再構成した『エレウシスの聖なる劇』を高く評価。
シュタイナー自身の神秘劇上演の前にこれを上演させ、「人智学的努力と密接に結びつく」としている。

●基本的な視点

エレウシスの聖なる劇は、
魂が天上の光を忘れ、物質界へ降下する過程を、
秘儀の「見せる劇」として描いている。
シュタイナーが高く評価したのは、この神話を
個人の内的体験・秘儀参入の型として読み直せる点にある。

劇の中心は、ペルセポネ＝「全人類の根源的な魂」の物語。
ペルセポネはもともとデメテル（天上の光・神聖なる理性）のもとで、
神々の姿を織る存在として描かれる。
織物は、世界の生成を内的に観照する魂の働き。

しかし魂は、エロス（変容・転換の力）に誘われ、
地上の花＝欲望の象徴に手を伸ばす。
その瞬間、大地が裂け、
プルトン（凝縮された物質・冥府）に連れ去られる。
これは「堕落」や単なる悲劇ではなく、
魂が物質界に宿り、神的起源の記憶を失い、
そこから再び光へ還るために必要な通過儀礼として置かれている。

登場人物は外面的な神々であると同時に、人間の内的諸力。
ヒエロファントがゼウスを、
ヒエロファンティデがデメテルを演じるという設定自体が、
外の神話と内の秘儀体験を重ねる装置になっている。

シュタイナーがこれを神秘劇の前に上演させた理由も、ここにある。
人智学的な努力は、失われた天上の記憶を、
思考・感情・意志の中で再び目覚めさせる営みだ、
という視点と直結しているからである。

●要点

・魂の二つの賜物：
デメテルは人間に「大地の収穫」と「魂の奥底への叡智の放射」を与えた。
前者で獣性を克服し、後者で神的種子の成長を感じ取る、
とプロローグは宣言する。

・織るペルセポネ：
ペルセポネはエーテルのヴェールに神々の姿とカオスまで織り込む。
しかし「自らを見たことのない織り手」＝自己認識の欠如が、
エロスに指摘される。

・禁じられた一歩：
母の警告は「エロスの声に耳を貸すな、大地の花を摘むな」。
花の香りは天上の光を奪い、記憶をむしり取る。
それでもペルセポネは、大地と冥府の秘密なしに神性の真の姿は知れない、
という誘いに従う。

・ナルキッソス：
エロスが弓先で呼び出す花。
人間の名は水仙、エロスの言葉では「欲望の永遠の象徴」。
天上の星（ディオニュソスの松明の先触れ）が、地上の花へ変容される。
香りを吸った瞬間、大地が割れ、プルトンが現れる。

・降下の意味：
ペルセポネの叫び「母上……」は、記憶の喪失の始まり。
ニンフたちの嘆きとエロスの笑いは、
この出来事が単なる事故ではなく、変容の霊が仕組んだ必然であることを示す。

・三つの領域：
ヘカテが象徴する「魂が肉体に宿り、また根源へ還るために通る三つの領域」が、
後の幕で展開される枠。
プロローグはその入口、すなわち「光から闇への移行」だけを見せる。

・秘儀の観客：
神秘主義者の合唱は、真理を追う個々の魂。
劇は神話の再現であると同時に、
見る者自身の魂の過程を映す鏡として構成されている。

※プロローグが終わる地点は、誘拐の完了。
ここから先は、デメテルの探索、魂の地上での迷い、
そして秘儀を通じた再結合へと向かうことになる。
主題は「失うこと」そのものではなく、
失った記憶を、物質を通過したあとでいかに取り戻すか、にある。

●本文

○登場人物一覧（その神秘的意味）

・聖なる伝令（ヒエロケリュクス）：
　ヘルメスに相当する。
　人間と神々を調停する精霊（ジーニアス）であり、秘儀の解釈者。
・ゼウス：
　デミウルゴス（宇宙の創造主）。宇宙の崇高なる創り手。
　エレウシス最高神官でありエウモルポス族の長である
　「ヒエロファント（秘儀伝授者）」がこれを演じる。
・デメテル：
　神聖なる理性、そして天上の光。
　最高神官の妻である「ヒエロファンティデ（女性秘儀伝授者）」がこれを演じる。
・ディオニュソス：
　ゼウスとデメテルの子。「言葉（ロゴス）」または宇宙に働きかける神聖なる霊。
・ペルセポネ：
　ゼウスとデメテルの娘。全人類の根源的な魂。
・エロス：
　翼のある少年の姿。万物を変容させ、転換させる者。
　宇宙の創造主（デミウルゴス）の道具であり、その魔術的な調停者。
・ニンフたちの合唱
・ヘカテ：
　三面（あるいは三つの姿）を持つ月の女神。変
　容と変身の精霊（ジーニアス）。
　魂が肉体に宿り、またその根源へと帰還するために通過せねばならない
　「三つの領域」をも象徴している。
・メタニラ：エレウシスの王ケレオスの未亡人。
・トリプトレモス：彼女の息子。若きエフェボス（青年）。
・ロドペ、カッリロエ、パイノ：メタニラの娘たち。
・プルトン：冥府の神、あるいは凝縮された物質。
・怪物と幻影、幼生（ラルヴァエ）と亡霊（レムレス）：
　ヘカテの口から現れる。
・神秘主義者たちの合唱：
　秘儀に参入する者たち。真理を追い求める個々の魂。
・至福者たちの合唱：デメテルの光の中にいる者たち。
・英雄たちの合唱

プロローグ：ペルセポネの誘拐

ヘルメス（秘儀の伝令官として、観客へ向かって：

自らの魂の内に、神の創造たる力を感じ取りながら、
人は思考を巡らせ、その心を
「大地の母」デメテルへと駆り立てる。
神々から授かった二つの賜物によって、

デメテルはこの宇宙の中に、人間の存在を正しく据え置いた。
デメテルは人間に大地の恵みを収穫させ、
それによって、人は己の獣性を克服する。
デメテルは神聖なる叡智の力を、
人間の魂の最も深い奥底へと放射する。
それによって、人は自らの精神の内に、
神の永遠なる種子が力強く育つ気配を感じ取るのだ。
デメテルの賜物の果実が実を結ぶとき、
人は言葉と行動をもって、それらに敬意を払う。
今、皆が耳にし、そして目にするのは、その有様である。

（舞台奥には、洞窟のある岩肌が見える。
　周囲はミルテの木立と数本のポプラに囲まれている。
　舞台手前は草原であり、ニンフたちが泉を囲んで横たわっている。）

デメテル
（頭にカラトス（籠型の冠）を戴き、手に笏を携え、厳粛な声で）：

この洞窟に、私はお前を遺していこう、
神々に愛されし我が子よ。
ここで、お前のベールを織りなすのだ。
お前を優しく囲むニンフたちの輪の中で、
母の帰りを待ちなさい。
天においては、お前の眼は
愛する我が家を、この宇宙における
誇り高きお前の領地を見つめることができる。

すべての神々がお前の呼び声に従うだろう！
だが、エロスの誘惑の声に耳を傾けてはならない。
あの者は狡猾であり、その優しい眼差しとは裏腹に、
裏切りの助言しか与えぬのだから。
お前はこの洞窟を離れてはならない。
そして、大地の魅惑的な花々を摘んではならない。
その香りはお前を酩酊させ、
あの者は、お前から天上の光を奪い去り、
お前の魂から記憶そのものをむしり取るだろう。
陽気なニンフたちの輪に留まりなさい、
お前を優しく囲み、
お前の元へと帰ってくる彼女たちの元に。
さあ、私たちは高きエーテルへと急ごう、
炎に包まれた、蛇の戦車に乗って！

ペルセポネ（色鮮やかな長いベールに刺繍をしながら）：

崇高にして、厳格なる母上、
私はあなたにそれを誓います。

あなたの気高い神聖なる姿から放たれ、
あなたの娘の魂にとって、
この上なく愛おしい
光の厳かな輝き。
それを私の誓いの証人としてください。
もし背くようなことがあれば、
神々の容赦なき罰が、不届きな私に下りますように。

（デメテル、退場。）

ニンフたちの合唱：

おお、ペルセポネ！ おお、処女（おとめ）よ！
天上の純潔なる花嫁よ！
あなたはベールの中に、
神々のまばゆき姿を織りなしてゆく。
地上の空虚なる欺瞞（あざむき）が、
永遠にあなたから遠ざかりますように！
真理の清らかな輝きだけが、
あなたの瞳に映りますように！
至高の天（エンピリアン）に生きるのです、
天そのものによって選ばれた、
あなたの夫、ディオニュソスとともに。
遠き太陽の清らかな光線のように、
彼の口づけは、あなたに触れるだけ。
彼はあなたの息吹によって生き、
あなたは彼の光の中で呼吸する。
この広大なる宇宙のどこを探しても、
これ以上の救済はありはしない。

ペルセポネ：

俗世のあらゆるものの数知れぬ姿が、
私の手によって織り込まれてゆく。
エーテルの広大なベールという、
あの蒼穹（あおぞら）の青の中へと。
それは幾重もの襞を見せているけれど、
その一つひとつが、神々の教えに従い、
私の象牙の針によって織られた姿を隠している。
私の技はついに、
この神々の領域の果てにまで達した。
混沌（カオス）の百の頭と、
その千本の腕、
私はそれらをもすべて織りあげたのだ、
死すべき定めの存在たちが、
カオスの胎内から断ち切られ、清められるように。

それなのに、今、カオスは彼らを
あの不毛な深淵から、
光と喜びの命へと呼び出しているというの？
神々の父（ゼウス）は、私にその暗き神秘を明かされた。
けれど、私の心は、その奇跡を成し遂げた
御方の姿をひと目見たいという渇望に、激しく脈打っている。

ニンフたち：

そんなことを考えてはなりません！
身を引きなさい、
その虚しい問いから。

ペルセポネ（立ち上がり、ベールを後ろへ撥ね退ける）：

おお、エロス、あなたこそは神々の
最長老にして最年少、
喜びと涙の源泉、
この世界の尽きせぬ泉。
おお、あなたは
不死なる者たちの中に数えられながらも、
目に見えず、知られざる者と呼ばれている。
神秘なるエロスよ！
まるで強大な呪縛にかけられたかのように、
私の魂の意識は逃げ去ってしまう、
ただ、あなたの名の
陶酔を誘う響きを耳にするだけで。

ニンフたちの合唱：

これ以上、探し求めてはなりません！
危険から逃れるのです、
人間を、そして神々をも
脅かすその危険から。

ペルセポネ（怯えた瞳で、虚空をじっと見つめる）：

記憶が、魂から消え去っていくというの？
魂は、恐怖に満たされているというの？
カオス……人間の姿、
底なしの深淵から湧き上がる、
数知れぬ性（さが）の群れ。
生成されつつある世界の叫び、
憎しみと戦争の叫び！
死の、恐るべき力。
これらすべてが、私の目の前に立ちはだかっている！

深淵が私を引きずり込んでゆく、
その暗き深みへと。
私の魂は、下へ下へと抗おうとしている。
エロスの呪縛が私を捉え、
彼は私に、あの松明を突きつける。
――死が、すでに私の前に立っている。
去って、恐ろしい夢の幻影よ。

（彼女は両手で顔を覆い、すすり泣く。）

ニンフたちの合唱：

おお、神聖なる処女よ！
それはただの夢、
けれど、もし不届きな渇望が
あなたの魂の内にそれを呼び覚ますなら、
それは現実となるでしょう。
天上の至福は、
あなたにとって幻影へと色褪せてしまう。
救済の警告が、
あなたに虚しく響くとき。
さあ、ベールを織り続けなさい、
エロスが不純なやり方であなたに明かすかもしれないものなど、忘れてしまうのです。

ペルセポネ：
（顔から両手を下ろす。その表情は先ほどとは一変している）

お前たちは愚かだ、
そして、これまでの私も愚かだった。
今、記憶が芽吹いてゆく。
私はただ、あの神聖なる秘儀に
思いを馳せればよいのだ。
オリンピアにおいて、私に明かされた。
神々のうちで最も美しい者、それこそがエロスであると。
羽ばたく戦車に乗り、あの御方は
不死なる神々の先頭を駆ける。
姿なき元素たちが
互いに結びつき、生命を創り出すその時に。
混沌（カオス）の深みから、
その愛の響きは英雄たちを誘（いざな）い、
エーテルの高みへと導く。
あの御方の知恵には、いかなる境界もない。
そこから全創造が
湧き出でた、あの炎のように、
あの御方の力が、諸世界に命を吹き込むのだ。
大地と、そして天そのものの

門の鍵を、
あの御方は振るうことができる！
おお、エロスよ、私の前に姿を現したまえ！

ニンフたちの合唱：

不幸せなお方、おやめなさい！

（エロスが、翼のある少年の姿で森の中から現れる。）

エロス：

なんと力強く響くことか、
ペルセポネがエロスを求める
その切なる願いが。――ここに、私はいる。

（ペルセポネ、自らの席に腰を下ろす。）

ペルセポネ：

エロス、あなたがこれほどまでに違うお姿だとは。
ペルセポネがあなたを見る目は、
かつて聞かされていた
あの絵に描かれた姿とは、まるで異なっている。
裏切りと狡猾、
人々はそう言った、
それらがあなたの魂を満たしていると。
けれど今、あなたを目の前にして、
私の心も
魂も、広く解き放たれてゆく。
その瞳は
なんと清らかで、開かれていることか。
子供の持つ美しさ、
無垢なるものの清らかな輝きが、
あなたの身体から溢れ出している。
あなたは比類なき知恵を
称えられているけれど、
あらゆる技芸への器用さも、それに劣らない。
さあ、今こそペルセポネに示しておくれ、
このベールの
意味深き仕事に、力を貸して。

エロス：

そのような願いに従い、
ペルセポネよ、私はあなたの足元に

身を横たえよう。
そして、このベールの織り目を
賛美しよう。見る者を驚かせるこの織り目は、
織り手であるあなたの、あの青い瞳を映し返している。
あなたの手が織り込んだのは、
並ぶもののない姿ばかり。
けれど、この宇宙でただ一つ、その美しさを超えるものがある。
それは、自らを知らぬもの、
鏡に映る我が身を、一度も見たことのないもの。
――すなわち、織り手であるあなた自身の姿だ。

（エロスは狡猾に微笑む。）

ペルセポネ（頬を染める）：

己の姿を見ることなど、叶うのですか？
エロスは、そのような姿を知っているというの？

エロス：

私の魂にとって、
それは未知のものではない。
神々の生成が、
その中から私を見つめている。――
だが、なぜあなたの仕事は
混沌（カオス）のところで終わっているのだろう？
そこにこそ、始まりがあり、
探求する魂が知るべき
闘争のゴールがあるというのに。
巨神（ティタン）たちの暴虐、
人間がいかにして生まれ出るか、
そして愛の力。
それらが、その精緻な眼差しからは見落とされている。

ペルセポネ：

私の知恵では、
そのような黙示（あかし）を授かるには足りません。
この先に続くものを
ペルセポネが成し遂げられるのは、
ただ、エロスの助けがあってこそ。

エロス：
（彼女に燃えるような視線を投げかけながら）

あなたの魂が望むものが、

不足することなどありはしない。
もしあなたが、その助け手に、たった一つのこと――
その助け手に対し、
ともにあの草原へと赴き、
最も美しい花々を摘むことを許してくださるなら。

ペルセポネ（厳粛に）：

もし私がそのような一歩を踏み出せば、
母上の賢明にして厳格な
お命じに背くことになってしまいます。
私は背くことになるのです。
――「エロスの声に惑わされ、
草原の花を
摘んではならない。
もしその警告に、
心が従わぬならば、
お前は取り返しのつかない、
神々のうちで最も惨めな存在となるだろう」と。

エロス：

母君は、大地と冥府の秘密が
娘の魂に明かされるのを
望んでおられないのだ。
あなたがその黙示を授かるためには、
あの花々の香りが必要不可欠。

ペルセポネ：

では、あなたはその花々を知っているのですか？

エロス：

私に知らぬことなど何もない。
その力によって、私はただ
より若々しくなるばかり。
神々の娘よ、知るが良い！
あの深淵は、天上の知らぬ
恐怖と戦慄に満ちている。
だが、大地の、そして冥府の力から隠されたままでは、
誰も神性の真の姿を知ることはできないのだ。

ペルセポネ：

あなたは魂に、

そのような知恵を授けることができるのですか？

【エロス】：
今こそ、それを証明しよう！

（エロスが弓の先で大地に触れると、
　一本の『大いなる水仙（ナルキッソス）』が湧き上がるように現れる。）

ペルセポネ：

おお、なんという奇跡でしょう！
意味深き記憶が、
震える心の中に呼び覚まされてゆく。
あれは、私が愛した星の上、
山々の頂で、
私がよく横たわり、休んでいたときのこと。
目覚めると、その星は私に向かって、
銀色に輝いていた。
広大なる天空の、淡き青の中で、
オパールのように煌めく星が。
それはまるで、神々によって
私に約束された夫からの、先触れのようだった。
ディオニュソスの松明のようだった、
現れては、いつも
すぐに沈んでゆくあの星は。
この花は、あの松明によく似ている。

エロス：

万物を変容させ、
その姿を作り変えることこそが私の仕事。
小さきものから、私は
最も偉大なるものの写し絵を創り出す。
深きところから、私は
天上の鏡を呼び出すのだ。
大地と天空において、
私はあらゆる形を混じり合わせる。
形なき深淵から、それらを
形作ることこそが私の使命なのだから。
私はあの深淵から、あなたが
自分のものと呼ぶあの星を、
花の姿に変えて連れてきたのだ。
あなたがその香りを吸い込めるように。

ニンフたちの合唱：

気をつけなさい、ペルセポネ！
禍いは容易く、
その魔術から生まれ出づるのです。

ペルセポネ：

教えておくれ、
この花の名前を。

エロス：

人間たちはそれを
ナルキッソス（水仙）と呼ぶ。
私の言葉では、
それは「欲望の永遠の象徴」。
よくご覧なさい。
それはまるで生きているかのように、
あなたを見上げ、
その繊細な、白い冠を輝かせている。
その香りは、内側で金色に生きる
中心から溢れ出している。
喜びを満たして、
それはあなたを取り囲む。
その魔法の花を、
あなたの顔へと近づけるのだ。
さすれば、あなたの目の前に、
深淵のあらゆる怪物たちが、そして大地の深底が抱く
いかなる秘密が、絵のように現れるだろう。
そして、人間の心を動かすものすべてが。
何ひとつ、あなたから隠されることはない。

ペルセポネ：

おお、不思義な花よ、
あなたの香りは私を酩酊させる！
私の心は震え、
指先は熱く火照り、
あなたを掴もうとしている！
あなたを吸い込みたい、
私の唇に押し当て、
この胸に抱きしめて、
至福のうちに死に絶えたい、
あなたの魔法の息吹の中で！

（彼女の傍らで大地が真っ二つに裂ける。
　大きく開いた黒い割れ目から、

黒い馬たちに引かれた戦車に乗ったプルトンが、ゆっくりと半身を現す。
ペルセポネが花を摘み取ったその瞬間、
プルトンは彼女を捕らえ、乱暴に我が身へと引き寄せる。
彼女は彼の腕の中で激しく抵抗し、大声をあげる。
直ちに戦車は沈み、姿を消す。
その轟音は、地底の雷鳴のように遠ざかってゆく。
ニンフたちは木立の中へと散り散りになり、嘆き悲しむ。
エロスは笑いながら逃げ去る。）

地底からのペルセポネの声：

助けて、母上、母上……！

■エドゥアール・シュレー
「エレウシスの聖なる劇」②
Edouard Schuré
The Sacred Drama of Eleusis

〔第一幕：デメテルの苦悩〕

●基本的な視点

第一幕は、天上の母が娘を失い、人間の悲しみのただ中へ降りてくる過程。
プロローグの「魂の誘拐」に対し、
「神が人間の家に宿り、秘儀の担い手を見出す」場面として置かれている。

デメテルは、ペルセポネ（根源的な魂）を冥府へ渡した
ゼウスの同意を知り、オリンピアを捨てる。
デメテルが求めるのは
「最も自由な地、最も誇り高い民、最も悲しみに満ちた家」であり、
それがエレウシスのケレオス家である。
女神はヘカテの力で老婆に姿を変え、炉端の客人となる。
神は栄光のままでは人間の涙に触れられず、
襤褸と沈黙をまとって初めて、地上の苦しみに同席できる、という構図。

その家で彼女が出会うのがトリプトレモス。
彼は王位を求めず、父の影のために畑を耕し、デメテルの名を呼ぶ。
穀物が種子から黄金の穂へ目覚めるなら、
死者の魂も新たな生命へ呼び戻せるはずだ、という彼の希望が、女神の心を動かす。
農業はここでは単なる生業ではなく、魂の復活の像である。

幕の頂点は、老婆の愛撫から光が走り、
トリプトレモスが光輝く姿となる場面。
デメテルは正体を現し、彼を最高神官に任じ、カッリコロスの丘に神殿を築けと命じる。
秘儀は、奪われたペルセポネを取り戻すための道として開かれる。
トリプトレモスの最後の言葉
――彼女を救い出すことで、私たち自身が真の自由を得る――が、
この幕の主題を一文に凝縮している。

●要点

・ヘカテとの出会い：

三つの領域を知る変容の女神だけが、真相を告げられる。
ペルセポネはプルトンに奪われ、それはゼウスの同意による。
デメテルが立ち入れぬ唯一の場所が冥府である。

・誓いと呪いの拒否：

ヘカテは「使者を呪うな」と求め、デメテルはステュクスにかけて誓う。
知らせそのものを憎むのではなく、
失われた娘を取り戻す道を探す、という姿勢。

・人間のもとへ：

女神は雷霆を振るうことを捨て、
自由・誇り・悲しみの三つが揃うエレウシスを選ぶ。
ケレオスは死に、メタニラは怒り、息子はまだ弱い。
嘆きと沈黙の家が、神の隠れ家になる。

・姿の変換：

ヘカテは月より降りる者に衣を織り、天へ還るときそれを剥ぐ役。
デメテルの神顔は皺に覆われ、神にも人にも見分けがつかなくなる。
涙を流すためには、不滅の姿をいったん損なわねばならない。

・炉端の接待：

メタニラは余所者を疑い、娘たちとトリプトレモスが迎え入れる。
ゼウスの名による客人の保護が、後の啓示の条件になる。
デメテルはクレタの乳母を名乗り、娘を奪われた母として語る。

・父の影：

トリプトレモスは墓でケレオスの影を見る。
影は、肉欲に沈んだ者は闇に覆われ、
生者の愛がなければ煙のように消える、と告げる。
冥府はペルセポネの流刑地でもあり、父の苦しみと娘の喪失がここで重なる。

・種子と復活：

彼がデメテルを呼ぶ理由は、大地に穂を芽吹かせる力が、
死者の魂をも呼び戻せると希望したからである。
女神はこれを、オリンピアの神々より輝かしい英雄の魂と見る。

・契約：

父の魂の解放と、娘をプルトンから取り戻すこととが、交換のように結ばれる。
デメテルはエウモルポスの歌と、世界を抜け出す道を授けると約束し、
彼を農耕の最も神聖な英雄とする、と運命に告げる。

・光の接触：

彼女が腕と胸に触れると、鮮烈な光、炎、雷が走り、
彼は陶酔のうちに女神を見つめる。

これは後の秘儀伝授の先触れ。
メタニラは火を魔女の仕業と呪い、
その瞬間に炎は消え、女神の真の姿が現れる。

・啓示と使命：

見知らぬ者への不慈悲を咎めつつ、
娘たちの優しさと息子のゆえにメタニラを許す。
神殿を築け、お前をヒエロファントとする、
デメテルとペルセポネのために秘儀を開け、と命じる。
メタニラは息子が自分を母と呼ぶことを呪い、トリプトレモスは
「ペルセポネを救い出すことで、私たちが自由を得る」と答える。

※第一幕が閉じる地点は、神殿建立の命令と、英雄の選定。
魂（ペルセポネ）の奪還は、まだ成就していない。
人間の側に、その使命を引き受ける者が立ったところまでが描かれる。

●本文

（舞台は「ヘカテの洞窟」を表している。巨大で薄暗い岩々。
　舞台奥から差し込むかすかな淡い光によって、辛うじて照らされている。）

第1場

デメテル、続いてヘカテ。
デメテルは白いペプロス（長衣）を身にまとっている。
銀の星々がちりばめられた青いマントが、その肩から流れ落ちている。
頭には王冠（ディアデム）を戴き、手には黄金の笏を携えている。
赤みを帯びた金髪は、空色のヘッドバンドで後ろにまとめられている。
彼女は両手に一本ずつ松明を持ち、急ぎ足で入場すると、洞窟の奥を覗き込む。

デメテル：

ヘカテ、ヘカテよ、
どこにいるのです？
彼女までもが姿を隠しているというの。
他の者たちがそうしたように、
彼女も私への答えを拒むのだろうか？
現れなさい、おお、ヘカテよ！
神々の母の、この切なる叫びを、
虚しく聞き流してはなりません。

（ヘカテが洞窟の奥からゆっくりと歩み出てくる。
彼女は黄金の竜の刺繍が施されたペプロスと、赤いマントを身にまとっている。
もつれのない輪を描く黒髪が、その首元へと垂れ下がっている。
手にはカードゥケウス（伝令の杖）を携えており、

そこに絡みつき、じっと見つめ合う二匹の蛇は、
まるで炎で形作られているかのようである。
彼女は美しいが、その瞳は恐ろしいほどの好奇心で輝き、古
代の彫像に見られるような謎めいた微笑みが、その唇に浮かんでいる。）

ヘカテ：

世界の女王たる御方が、
哀れな声で私を呼んでおられる。
そのお声に導かれ、私は急ぎ参じました。
デメテル様が我が洞窟に姿を現されるなど、
これが初めてのことにございます。
高貴なる女神よ、
私にいかなる命を下されるのですか？

デメテル：

薄明と夜の娘よ、
今日まで、私はあなたの油断ならぬ視線を避けてきた。
荒野を突き抜けて、至高の天（エンピリアン）へと至る道を、
ただ独りで見出すことのできる、その視線を。
けれど今日、この絶望の中で、私は
かつて常に避けていた者の助けを乞わねばならない。
私は娘のペルセポネを、
ニンフたちと遊ばせておいたのです、
我が娘、ペルセポネを。
オケアノス（大洋）の子供たちとともに、
ヒヤシンスやアヤメの花を摘めるようにと。
あの子が幸せに過ごしていると信じ、私は再び至高の天へと昇り、
季節の移ろいに左右されることのない
あの溢れる光の波の中で、
至福の喜びに身を委ねていた。
ところが突然、エーテルの天球を突き抜けて、
嘆きの叫びが響き渡ったのです、
この母の心へと。
あれは、ペルセポネの声だった。
まるで、暴力に晒されているかのような、
そんな恐ろしい叫び声だった。
そして、その恐るべき苦痛の叫びは
三度も繰り返され、
私の存在を根底から揺るがしたのち、
深淵の彼方へと消え去っていった。
私はこの二本の松明をひっ掴むと、
急ぎ地上へと降り立ち、
あらゆる方角を捜し求め、
私の叫び声で

広大な山々を満たしたのです。
すべての神々が、私の口から漏れた
あの誓いを聞くべきだったというのに！
けれど、誰もが私に対して沈黙を守り続けた。
何ひとつ隠し通すことのできぬはずのヘリオス（太陽神）でさえ、
私に答えを返そうとはしなかった。
これほどまでに恐ろしい秘密が、
私の知恵から隠されているというの？ だから誰も、
この張り裂けんばかりの問いに答える勇気を持てないというの？
さあ、教えておくれ、おお、ヘカテよ、何が起きたのかを。
あなたは、待ち伏せのために横たわる
あの曲がりくねった小道を知悉しているはず。
ゼウスの隠された意図を、
狡猾な斥候（スカウト）のように見通しているはずだ。
あなたの顔に浮かぶ
その謎めいた微笑みを見れば、
あなたが変わらぬ
解決の鍵を握っていることが、私には分かるのです。

ヘカテ：

私は知っております、
そして、あなた様もそれを知ることになるでしょう。
けれど、まずは私に誓ってください。
あなた様を襲った禍（わざわい）を
告げる使者を、決して呪わないと。

デメテル：

あなたに約束しましょう、
最も美しい光の賜物を。
ステュクスの川に懸けて、忠実にそれを誓います。
そして、この張り裂けそうな重き疑念から
私を救ってくれる者を、デメテルは友と呼ぶでしょう。
ひとたびペルセポネがどこにいるかさえ分かれば、
あの子を見つけ出し、連れ戻すことなど、
母親の心が、どうして成し遂げずにいられましょう。

ヘカテ：

プルトンが、あなた様の娘を奪い去ったのです。
天と地を統べる主、
ゼウスの同意を得て。
あなた様の夫君（ゼウス）ご自身が、あの子を
彼の妻として差し出されたのです。

（デメテルは両手の松明を取り落とす。松明はかき消えるように消える。）

デメテル：

プルトンに連れ去られた、と……。
あの、冥府の王に。
そこは、私が
立ち入ることを
決して許されぬ、唯一の場所。

（彼女は岩の上に腰を崩し、その頭は胸元へと力なく沈み込む。）

ヘカテ：

お考え直しくだされ。
ハデス（冥府の王）とて、あなた様の娘婿として
決して不釣り合いな御方ではございませぬ。
ゼウス様の高貴なる義弟であり、
数知れぬ富を統べる王なのですから！
確かな眼を持つこの私には、あの大地の下が
喜びなき深淵などと
誤って呼ばれていることが
よく分かります。
死者の女王となることは、
神々の召使として生きるよりも、はるかに誇り高きこと。

デメテル（姿勢を変えぬまま）：

死者の領域において、不死なる者が
冒涜され、汚されるというのか。
あの清らかな処女（むすめ）が、
プルトンのすべてを食い尽くす腕の中で！
あの子の瞳からは、
天上の喜びの記憶が消し去られてしまう。
私の口づけを受けては閉じ、また開いていた、
あの星のごときナルキッソスの花のように輝き、
満天の星空を映し返していた、あの子の瞳から。
我が娘と引き裂かれるとは！
おお、永劫に色褪せぬこの痛み、
決して曇ることなきこの恐怖！
気高きオリンピアの山を訪れることは、
もう二度と私には許されない。
あの者が貪り食う、
あの深淵の恐怖が、私を満たしている。
もし、この手で
夫（ゼウス）の雷霆（いかずち）を

操ることができるなら、
私は宇宙のこの偉大なる構造を
打ち砕いてでも、
我が娘を力ずくで連れ戻すものを。
私はこの天上の徴（しるし）を
投げ捨ててしまいたい！
絶望に暮れる母親となること、それこそが私の運命なのだ。

（彼女は頭から空色のヘッドバンドをむしり取り、地面へと投げつける。）

ヘカテ：

気高きデメテル様、
これから、どこで生きてゆかれるおつもりですか？

デメテル：

惨めな人間たちを、
私の連れ添いとしよう。

ヘカテ：

いかなる地で？

デメテル：

自由が息づく地だ。

ヘカテ：

そして、いかなる民が
あなた様を受け入れるのでしょう？

デメテル：

果てなき誇りを
己のものとする民だ。

ヘカテ：

いかなる家で？

デメテル：

最も惨めさに満ちた家だ。
私はそこで、不死なる者の涙を流し、

あの雷霆の主（ゼウス）に立ち向かうのだ。
邪悪な弟の、臆病な加担者となり下がったあの男に。
教えておくれ、私はどこへ向かえばよいのか。
最も自由なる大地、
最も誇り高き民、そして最も悲しみに満ちた家を見出すために。

ヘカテ：

アッティカの地、
パラス（アテナ）の岩肌からほど近き、
豚飼いたちの集う、客人をもてなす海岸。
メガラの山々に守られ、
オケアノスの白き帯に囲まれたその場所に、
あなた様が求めるものがございます。
その名は、エレウシス。
荒波が砕け散るその傍らで、
空色のネレイス（海のニンフ）たちが優しく囁き、
ゼピュロス（西風）が
陽気な息吹を吹き込んでおります。
そこには自由なる民が暮らしており、
正義の心をみなぎらせ、
実直に農耕の仕事へと励んでおります。
彼らは畏敬の念をもってあなた様を見上げ、
「育みの地」と呼ぶのです。
彼らは、ヘリオス（太陽神）の
灼熱の視線から身を守る盾として、黄金の麦の穂と豊かな収穫を選びました。
そしてそこには、喪に服している一族がおります。
ケレオス王がその長でしたが、
彼は今、死の領域へと足を踏み入れたばかり。
未亡人となったメタニラが、三人の娘たちと、
ただ馬と鍬だけを愛する息子、
トリプトレモスとともに、王を思って泣き崩れております。
偉大なる王の跡継ぎは、
いまだあまりに弱く、
身寄りのない者たちを守るすべを持ちませぬ。
そこには、まるで支配者の誇り高き家が
墓所へと変えられてしまったかのように、
嘆きと、沈黙と、恐怖が支配しております。

デメテル：

その門前で、このデメテルは入国を乞おう。
その囲炉裏こそが、
悲しみに暮れる者に隠れ家を与えてくれるだろう。
ヘカテよ、お前の力を貸しておくれ。
私が姿を変え、

彷徨える、落ちぶれた老婆の仮面を被れるように。

ヘカテ（微笑みながら）：

尊き女神よ、それが
成就いたしますよう、このヘカテの
器用な両手を、喜んで捧げましょう。
様々な仮面を織りなし、
姿から姿へと変容させることこそ、昔からの私の天職。
月より地上へと
降り立つ存在たちのために、美しい衣を織りあげ、
彼らが再びウラヌス（天）への道を
見出さねばならぬとき、それを
剥ぎ取ることもまた、変容の女王たる私の役目。
偉大なる女神よ、
私が幾度も修めてきたこの技の果実が、不足することなどありはしませぬ。
さあ、我が洞窟の深みへと私に続きなさい。
蛇の杖の力によって、
あなた様の神としての栄光はかき消えるでしょう。
この若々しくも美しい神の顔は、
深い皺によって台無しにされ、
神々にとっても
人間にとっても、誰一人として見分けのつかぬ姿となるのです。

デメテル：

こうして、恥ずべき仮面によって、
不死なる者は己の姿を損なわねばならぬのか。
女神が自らを、貶めねばならぬのか。
だが、そうして初めて、この引き裂かれた心から
涙を流すことができるのだ。

（ヘカテとデメテル、洞窟の奥へと姿を消す。）

（舞台はエレウシスにあるケレオス王の宮殿の内部。左右にはドーリア式の柱が並んでいる。舞台奥には、神殿の「内陣」に似た窪みがあり、そこには家の祭壇が据えられている。祭壇の上の火はほとんど消えかかり、灰の下でかすかに熾っている。メタニラは喪に服し、椅子に腰掛けている。彼女の三人の娘たちも同じく喪服に身を包み、祭壇の階段に身を寄せ合っている。左右では、パイノとカッリロエが地面に置いた献酒用の甕を、解いた髪を垂らしながら両腕で抱きかき抱くようにして、半ば横たわっている。中央に座るロドペは、甕を膝の上に乗せて物思いに沈んでいる。）

第2場

カッリロエ：

おお、父上、ケレオス王よ。

暗き死が、あなたを
この家から奪い去ってしまう前は、
この壁の内には
お祭りの喜びが輝いておりました。
娘たちは、アルテミスと三美神を称えて、
あの神聖なるオリーブの木の下で、
瑞々しく、軽やかに舞い踊っていたのです。
それなのに、あなたは私たちを遺して逝ってしまわれた。
私たちがあなたの墓に
聖なる水を注ぎ、
その御名を呼び奉っても、
あの暗き場所からは、
いかなる答えも返ってはきません。

パイノ：

おお、心から愛する父上。
夕暮れの賑やかな宴の席で、
葡萄の蔓で飾られた杯に、
清らかなワインを満たして、
あなたへとお持ちすることが、私の何よりの喜びでした。
そして、「お前は私の目の光だ、
その瞳は、一日の奇跡を告げる
穏やかな夜明けの優しさに似ている」と、
あなたが私を褒めてくださるのを耳にいたしました。
今、私たちはあなたの墓の上に、
草と花々の毛布を敷き詰め、
葬儀の宴のために、
果物や菓子を用意いたしました。
けれど、私たちがいつも楽しみにしていた
あなたの微笑みだけが、そこにはないのです。
今、私の目から溢れ出る
この涙は、果たしてあなたに届いているのでしょうか？

ロドペ：

おお、父上、いまあなたは
どのような存在となっておられるのですか？
私たちは武器や衣服とともに、
あなたを火葬の火へと捧げました。
あなたの遺灰は甕に収められ、
墓の奥深くに眠っています。
では、お疲れになったあなたの影（ナタエ）は、どこにあるのです？
墓の内に留まっているのですか、
それとも、地上を彷徨っておられるのですか？
それを知るのは、影の領域に棲む

不気味な存在たちだけ。
けれど、私たちは愛する死者を尊ぶために
定められた、
この神聖なる習わしを、
決しておろそかにはいたしません。

メタニラ：

あの子たちの目には涙があるけれど、
私の心にあるのは怒りです。
娘たちは虚しい影に向かって嘆願している。
けれど私を突き動かすのは、
生きている者に力を貸したいという、激しい渇望なのです。

第3場

（一同、そこへトリプトレモスが入場する。十八歳の青年（エフェボス）。片手に馬の轡、もう片手に槍の形をした穂先（突き棒）を携えている。その佇まいは厳粛にして、謙虚である。）

メタニラ：

どこへ行っていたのです？

トリプトレモス：

父上の墓へ行っておりました。

メタニラ：

そこで何をしていたのです？

トリプトレモス：

馬を調教し、
我が畑を耕しておりました。

メタニラ：

では、知らないのですか。
本日、アゴラ（広場）で民衆の集会が開かれ、
このエレウシスに
新たな王が選ばれようとしていることを！
民の意志によって、父の跡を継ぐべきは
息子であるあなたなのです。
けれど、あなたが民の前に姿を現し、

語りかけず、若さゆえの
力強さを示しもせず、
民の望むゴールへと導く約束もしないなら、
誰一人としてあなたに投票しはしないでしょう。

トリプトレモス：

私は民の引き立てや
票を乞うような真似はいたしません。
私は戦いの中で、言葉と行動をもって、
己の力と正義を
すでに証明してまいりました。
己の指導者を選ぼうとする者たちなら、
私のことをよく知っているはず。
もし彼らが、何の手回しもせずとも
私を適任だと認めるならば、私は
父上の職務を引き継ぎましょう。
そうでなければ、他の誰にでも
王冠の誉れと重荷を背負わせるが良いのです。

メタニラ：

彼らはあなたの叔父を選ぶでしょう。
そして、ドリコスが最初の
王として選ばれた暁には、あの男は
私たちの財産を強奪し、
長きにわたり父上が神聖なる儀式を執り行ってきた
この家から、私たちを追い出すに違いありません。

トリプトレモス：

あの者がこの都市を、王座を差し押さえ、
父上が立っていたあの場所から
私を退けようとするならば、そうさせるが良い。
けれど、あの男とて私から鍬を毟り取ることはできないし、
その鍬が耕す
大地の土くれだけは、
私に残さざるを得ないはずです。
神が私をお呼びにならぬ限り、
私がエレウシスの王になることはありません。
ここに、二度にわたり誓いましょう。

メタニラ：

おお、愚かな息子よ！ あなたは
恩義というものが分かっていない。

ああ、災い、禍いなるかな！

第4場

（一同。デメテルが老婆に身をやつして現れる。背を丸め、灰色のマントに身を包み、手には杖を携えている。彼女は扉のところで立ち止まり、炉端に向かって、懇願するように手を差し伸べる。トリプトレモスは槍に寄りかかったまま、微動だにしない。三人のうら若き娘たちが立ち上がる。）

メタニラ（座ったまま）：

見知らぬ者よ、あれは誰ですか？

パイノ：

年齢に腰の曲がった、お婆さんのようです。

カッリロエ：

けれど、どこか気品のあるお姿だわ。

ロドペ：

異国の土地から来たのでしょう、あの身なりは
ここでは見慣れない、珍しいものです。

メタニラ：

物乞いにやって来たようですね。

パイノ：

歩く力さえ残っていないようです！
お母様、あの哀れな方を
家の中へ案内させてください。

カッリロエ：

飢えと渇きのために、
きっと疲れ果てておられるのだわ。

ロドペ：

それに、手足の痛みよりも
もっと耐え難い
心の苦しみを、あの方は抱えているように見えます。

メタニラ：

私は、何も言わずに
私たちの炉端へと忍び込み、
不誠実な企みを隠し持っているような余所者を、
受け入れるわけにはいきません。
いかなる敵が、私たちを害するために
あの者を送り込んできたかも分からぬし、
あのマントの襞の内に、
いかなる災いが潜んでいるかも知れないのですから。
見知らぬ女よ、あなたに問う。
何か伝えるべき伝言があるのか、それとも乞い願う慈悲があるのか。
お前を送り出した者について
語るというなら、ここに留まることを許しましょう。
もし拒むというなら、
私の家へ入ってはなりません。

（デメテルは両手を炉端へと伸ばし、それからその手を顔へと戻し、声もなくすすり泣いているように見える。）

パイノ：

あの方は宿を求めているのです。

カッリロエ：

あの方の涙が、それを物語っていますわ。

ロドペ：

あの方の不運が、それを物語っています。

三人の娘たち：

お母様、どうか慈悲を、
あの方を受け入れてあげてください！

（メタニラは身動きもせず、沈黙を保っている。）

トリプトレモス：

すべての亡命者に慈悲深き、
あの偉大なるゼウスの御名において。
見知らぬ人よ、あなたがこの家に迎えられることを許そう。
あなたの名が知られたものであろうと、

知られざるものであろうと。

（三人の姉妹がデメテルを支えようとし、炉端のそばにある椅子へと案内する。デメテルはうつむき、絶望的な深い悲しみの姿勢のまま、ゆっくりと腰を下ろす。トリプトレモスは馬の轡と槍を脇に置き、ワインの入った杯を取ると、それをデメテルへと差し出す。）

トリプトレモス：

見知らぬ人よ、私にとって気高く尊きあなたに、この杯を捧げます。
渇きを癒やし、私たちの客となってくだされ。
そののち、もし語りたいことがあるならば、
私たちはあなたの言葉に耳を傾けましょう。
けれど、たとえあなたが沈黙を守り、
その不運が隠されたままであろうとも、
あなたが内に秘めるその痛みは、
私たちにとって、いささかも神聖さを失うことはありません。

（デメテルは杯を受け取り、ベールの下で一口すする。それから杯をトリプトレモスへと返し、感謝を込めて両手を合わせると、再び深い物思いへと沈み込む。）

メタニラ：

さて、あなたが私たちの客となり、
この屋根があなたを守る盾となったからには、
あなたがどこから来られ、何者であるか、
いかなる国に暮らし、
いかなる運命に流されて
この海岸へと逃れてこられたのか、
それを私たちに明かすことこそ、正しく、相応しいこと。

デメテル
（頭をわずかに上げ、その襤褸（ぼろ）をまとった姿とは対照的な、威厳に満ちた声で語る】：

私はクレタの出身です。
あちらでは、大理石で築かれ、
気高き黄金で飾られた
あるお屋敷に暮らしておりました。
王の子供たちのお世話を、
この私が委ねられていたからです。
神々の恵みによって祝福され、
私自身も一人の娘を授かりました。
その子は、森の中の
鹿のようにしなやかで、
ニンフのように優しい娘でした。
けれど、一人の略奪者が、私の大切な我が子を強奪したのです。
それ以来、 岸辺から岸辺へと彷徨うことこそが

私の運命となりました。
失われた子の痕跡を、
虚しく捜し求めながら。
この故郷なき流浪の暮らしの中で、
すでに多くの年月が流れ去りました。
慰めもなく脈打つ私の心は、
いまや老いさらばえ、無力です。
おぉ、メタニラよ、私をあなたの家へ入れてくださいますか。
私はあなたの娘たちを忠実にお世話し、
象牙の織機（はた）で
美しい織物を織る技や、
その他の価値ある芸を彼女たちに教えましょう。
王宮の秘められた事柄なら、
すべて私には通じております。
漆黒の苦痛を癒やす
香油の調合も知悉しております。
かつてゼウスが降臨された、
あのイダ山の魔法の薬草たちも――

（「ゼウス」の名が呼ばれた瞬間、小さな火花がパッと燃え上がる）

――私の知恵から隠されてはいません。
それらは、癒やし手である私自身を除いた、
あらゆる人々に治癒をもたらすことができるのです。

パイノ：

この苦難を背負う方の声は、
なんと優しく、そしてなんと謎めいているのでしょう。

カッリロエ：

まるで、神殿の中で
哀れに響く、あの竪琴（ライアー）の音のようですわ。

ロドペ：

あの方が紡ぐ言葉は、
まるで女王の口から放たれるもののよう。

メタニラ：

王の娘からの伝言であるかのように、
あなたの言葉は響きました、見知らぬ人よ。
なればこそ、あなたを
この気高き家へと歓迎いたしましょう。

もっとも、私たちがここを「我が家」と呼べるのも、
もうそれほど長くはないかも知れませんが。
あなたも知るべきです、ドリコスが
我が息子から、その気高き父親が長年保持してきた
あの神聖なる職務を、
奪い取ろうとしていることを。
おぉ、年齢を重ねて経験豊かな、
知恵ある女性よ。言葉の魔術師たるあなたよ、
しばしの間、我が息子と
二人きりで残ってください。
あの子に思慮深さを教え込み、
民衆のすべての前で、
父上の王冠を欲するよう、あの子の心を導いてほしいのです。

デメテル：

分かりました、あの若者と話をしましょう。

メタニラ（娘たちに向かって）：

見知らぬ方のために、
食事の用意をなさい。トリプトレモスは
ここに残り、あの方のそばについているように。
その間に、私自身は、
評議会の長老たちの耳を
傾けさせるべく、手を尽くしてまいりましょう。

（メタニラ、三人の娘たちを伴って退場。）

第5場

デメテル、トリプトレモス。

デメテル：

どのような暗い悲しみが、
あなたの若き額に重くのしかかっているのです、
我がトリプトレモスよ？

トリプトレモス：

父が、亡くなったのです。

デメテル：

考えてもごらんなさい、息子が
父親を失う苦しみは、
母親がその娘を失う苦痛に比べれば、
はるかに小さなものです。
それでもなお、あなたの嘆きを
神々へと向けるのですか？

トリプトレモス：

私は誰も呪いはしません。
なぜなら、私は他のすべての人々と
変わらぬ運命を耐えているに過ぎないからです。
むしろ、死というものは、
あとに残された者よりも、
旅立ってしまった死者たちに対して、はるかに残酷なもの。

デメテル：

どうしてそれを知っているのです？

トリプトレモス（声を潜めて）：

ある夕暮れのこと、プルトンが好む
あの儀式を私が執り行っていたとき、
ケレオスの墓の上で
一頭の子羊を屠り、
父の魂を呼び覚まそうといたしました。
漆黒の血の煙の向こうに、
私はその影が立ち上がるのを見たのです。
青白く、恐ろしい姿を。
重く立ち込める霧を突き抜けて、
父が私に語りかけた言葉が、耳に届きました。
「ただの影となって、追い立てられ、
不幸にして、恐怖の幻影に
苛まれている……。
プルトンの心には、情け容赦がないからだ。
あの男は、生前、
肉欲と無分別な快楽に
身を委ねていた者たちを、
深い闇の底へと覆い隠してしまう。
もし不死なる精霊が
死者を守ってくれないならば、死者たちは
ただ、生きている者が
彼らへと送り届ける愛によってしか、生き長らえることはできぬ。
私たちは、彼らに見捨てられ、
この地下で

虚しい煙のように霧散せねばならぬのだ。
夜と恐怖の中で、私は
彷徨わねばならぬ、影として。
他の影たちに追い回され、
他の恐怖の幻影に
怯えねばならぬ、悍ましき幻影として……。
ただお前だけだ、トリプトレモス、我が息子よ、
お前だけが私に
エリシオンの平穏を、与えることができるのだ」と。
「喜んでそういたしましょう」
私は父に言いました。
「けれど、どうすれば私は
あなたに届くのですか？」
するとその影は、いっそう青白く
姿を変え、溜息を漏らしました。
「おぉ、私を忘れないでおくれ、
我が息子よ、
私は苦しまねばならぬ、苦しまねばならぬのだ」と。
そうして、その影の幻影は消え去りました。

デメテル（傍白）：

おぉ、プルトンの恐るべき領域よ。
ペルセポネは、そこへと流刑に処されたのだ。

トリプトレモス：

あなたを取り乱させてしまったようだ。
手にする杖の上で、
あなたの両手が震えている。
そのベールの隙間から、
あなたの涙が見える。
どうされたのですか、
おぉ、痛みに震える女性よ？

デメテル（くぐもった声で）：

おぉ、教えておくれ、あなたは父親の
あの呪われた影のために、
何をしてあげられたというのです？

トリプトレモス：

私は父の墓を花々で飾り、
それから再び、
鍬の元へと戻りました。

大いなるデメテルの御名を呼び求めながら、
私は畑を耕し、
種を蒔いたのです。

デメテル：

なぜ、あなたは
デメテルを呼び求めたのです？

トリプトレモス：

私はその女神を知りません。
けれど、女神たちのうちで最も偉大にして、
神々の母であると称されています。
天に住まい、地を統べるお方とは、
まさにその女神のことではないのですか？
穀物も、花々も、
その女神の力によって繁茂するのではないのですか？

デメテル：

けれど、その女神があなたの父親の魂を
救い出せるという考えは、
一体何に基づいているのです？

トリプトレモス：

人間の手から
種子を受け取った、
この母なる大地の上に、毛布を広げるのはその女神です。
そして、春の
暖かい息吹とともに、
緑の尖端が顔を覗かせ、
やがて実を結び、
黄金の麦の穂となるのです！
黄金の果実を生命へと目覚めさせることができる御方であるなら、
死者の領域へと下っていった
魂たちをも、新たな生命へと
呼び戻すことができるはず。
そのように、希望が告げ知らせてくれたのです。
私の頭上で、まるで畝の上のひばりのように
歌いながら。

（デメテルは身震いし、感動の面持ちでトリプトレモスを見つめる。）

デメテル（傍白）：

なんと美しい、
誇り高き若者だろう！
その大胆な希望を抱く姿は、
あの穏やかな静寂の中にいる
オリンピアのどの神々よりも、私には輝かしく思える。
その胸にあるのは英雄の魂であり、
あの若者こそは、疑いなく
神となるに値する。
もしジュピター（ゼウス）が私の助けを借りずに
あの賢きアテナを創り出したというのなら、
この私にだって、
一人の処女なる青年（エフェボス）から
一柱の神を創り出すことなど、
成し遂げられぬはずがない！

（彼女は突然、毅然と姿勢を正す。）

あの者を不死の存在とすること、それこそが私の意志。
なぜなら、あの者だけが、我が娘を連れ戻すことで
私に恩を返すことができるのだから。

トリプトレモス：

おぉ、奇妙なる亡命者よ、あなたに何が起きたのです？
あなたの思考の中で、
その老いた年齢が剥ぎ取られ、
あなたのペプロス（長衣）から火花が飛び散り、
ベールの後ろで
松明が燃え上がっているかのように見える。

デメテル（腰を下ろし、再び老婆の姿勢に戻る）：

それはただの炉端の火の粉が、
私の衣服に映り込んだだけのこと。
そして、母親の苦痛の中で
あなたが流した涙が、
炎のように見えただけのことです。
さあ、もっと私の近くへ来なさい。
そして、私の言うことをお聞き。
私は多くを学び、
数々の秘密を知っています。
そして、いまあなたの前に立つ
この善良なる魔女が、
重ねた年月によって授かった、多くの癒やしの術（すべ）を。
あなたは父親の

呪われた魂を思って泣いているけれど、私は
失われた娘を思って嘆いている。
私はあなたに誓いましょう、
あなたの父親の魂が、
あの深淵の暗き領域から
解放されるであろうことを。
もし、あなたの持つ強大な力が、
我が娘を、
その娘を獲物として選んだあの略奪者から、
毟り取ってくれるというならば。

トリプトレモス：

私は決して躊躇いません、
あなた様にそれほどまでの
不当な苦しみを与えた略奪者が
誰であるかを知ったならば。

デメテル：

もしその正体を知ったとしても、
あなたの魂にある勇気だけでは足りぬでしょう。

トリプトレモス：

私のように、荒ぶる馬を飼い慣らし、
山々の猛獣たちを
槍をもって
ねじ伏せることのできる男なら、
そのような略奪者を前にしても、
決して怯みはいたしません。

デメテル：

ならば知るが良い、我が娘は死に、
その略奪者とはプルトン（冥王）であることを。
なれば、あなたは命を賭さねばならない、
あのタルタロスの
暗き領域へと、下っていくという危険に。

トリプトレモス：

影たちの出現は、
光の領域を愛する者にとっては、
実に恐ろしいものです。
けれど、もしあなた様が

その門を開いてくださるならば、
私は地獄へとも下りましょう。

トリプトレモス（厳粛に、かつ冷静に）：

それが何だというのです？ 私は大いなるデメテルを、
穀物が芽吹く、父上の
あの清められた畑の上で
呼び求めるだけです。
私の呼び声は必ずや突き抜ける、
たとえウラヌス（天）の深淵にあろうとも、
私の声はあの女神へと届くはずです。

デメテル：

おお、気高き血統よ、人間の乳によって
育まれた、若き獅子よ！
幼子の敬虔さが、
あなたの心の中に息づいている。
その唇からは
賢者の蜜が溢れ、
その瞳からは
英雄の炎が火花を散らしている。
母親のように、私はあなたを
愛さねばならない。人間を超えた存在として、
あなたを我が息子と呼び、
あなたの中に、それを見出したいのです。
そして、これまで人間の知恵から
厳重に隠されてきた数々の秘密を、あなたに明かしましょう。
高き天が何を隠し、深き地底が何を
秘めているのかを告げ、あなたの目から
あの盲目の目隠しを、毟り取ってあげましょう。
あなたの力に比べれば、
地上の王や支配者たちの権力など、
取るに足りぬほど小さなものとなる。
神聖なるエウモルポス族の歌を、
あなたに授けましょう。
そして、これらの世界から
抜け出すための道筋を、あなたに刻み込ませるのです。
タルタロスが、裏切りに満ちた人間たちが、
そして全能のゼウスが阻もうとも、
いつの日か、あなたが我が娘を
ヘカテの燃え盛る蛇の戦車に乗せ、
天上の光の中へと連れ戻す日が来るでしょう。
運命よ、トリプトレモスを、
農耕を司る定めの、

神々の中で最も神聖なる英雄たらしめよ。

トリプトレモス：

偉大なる母よ、あなたは何者なのです。
実の母親よりも、
私にこれほどの畏敬の念を抱かせるあなたは？

デメテル：

時が来れば分かるでしょう。
けれど今は、私の秘術によって、
あなたを傷一つ負わぬ身（不死身）とせねばならない。
私に計り知れぬ
救済をもたらす、あの恐るべき使命のために。
この両手をもって、
私はあなたのために鎧を鍛えよう。
エーテルのごとく軽やかでありながら、
同時に決して壊れることのないその鎧は、
あなたに地獄と天上の門を
突き抜けさせ、あの暗き場所に
飢えて待ち伏せる、狂暴な悪霊どもとて、
あなたを害することはできなくなるでしょう。

（デメテルは両手でトリプトレモスの腕と胸に触れる。デメテルの愛撫から鮮烈な光が放たれ、トリプトレモスは光輝く姿となって、陶酔（エスタシー）のうちに女神の瞳をじっと見つめる。二人の周囲で、炎と雷霆（いかずち）が火花を散らす。）

第6場

一同。メタニラ、パイノ、ロドペ、カッリロエ。

メタニラ：

助けて！ 宮殿から火が出ているわ！
呪わしい、邪悪な魔女め！
我が炉端へ入れてあげた恩を、このような形で返すというの！
我が炉端へ置いてやったというのに！ 三面のヘカテよ、お前を、
そしてお前が燃え立たせたこの火を、滅ぼし尽くして。
お前は私たちの敵、あのドリコスから、
我が息子の目を晦まし、
私たちに民衆の呪いをもたらすために
送り込まれたのだわ。
息子の目を晦まし、
私たちの頭上に、

民衆の呪いを引き寄せるために。
去れ、忌まわしい化け物め！

（メタニラの最後の言葉と同時に、炎は突如として消え去り、広間は暗転し、炉の火はかき消える。しかし、デメテルがベールと老婆のマントを撥ね退けると、その神聖なる容顔がにわかに光り輝き始める。彼女の手の杖は、燃え盛る松明へと姿を変えている。）

メタニラ：

不死なる領域から来られ、
私たちを弄（もてあそ）ぶのは、一体どなたなのです？
私の力は、尽き果てました……。

（彼女は打ち砕かれたように床へと崩れ落ち、頭を椅子に預け、顔を両手で覆い隠す。）

三人の娘たち（膝をついて平伏しながら）：

私たちに慈悲を、大いなるゼウスよ！

トリプトレモス（一人毅然と立ち尽くし、陶酔の中に没頭している）：

私の前に立たれるのは、一体どなたですか、おお、女神よ？

デメテル：

私はデメテル、私自身が、
あの女神なのです。

（メタニラの方を向き、冷静かつ威厳に満ちた声で）

あなたは、
見知らぬ者や亡命者に対し、慈悲深く接しなかった。
その瞬間、お前の心は
無意識のうちにあったのだ、おぉ、女よ。
惨めさの姿をとり、
襤褸の仮面を被って、
名もなき神々が現れるということを、
そうして涙の影に自らを隠しているということを。
けれど、あなたとは違って、
あなたの娘たちが優しさをもって私を迎え、
そして何より、
あなたがこの息子の母親であるがゆえに、
デメテルはあなたを許しましょう。
けれど、私は防ぐことはできません、
エレウシスの子供たちと、
あなたに似た者たちとの間で燃え上がるであろう、あの戦いを。

それは、あなたが私に向けた、
あの愛なき歓迎の果実として、激しく燃え盛るのです。
だが、ケレオスの息子よ、
私はあなたを愛しましょう、
我が娘を愛するのと同じように。
あなたが、あの地獄の暗き力から、
私のもとへと峯り取ってくれるであろう、あの娘と同じように。
さあ、今すぐアゴラ（広場）へ行き、
民衆に告げなさい。女神デメテルが、
エレウシスの地に
カッリコロスの丘が盛り上がるところ、
そこに神殿を築けと、命じておられると。
私はあなたを、
我が最高神官（ヒエロファント）に任じましょう。
あなたの栄光は、
先祖である王たちのそれを遥かに凌駕する。
そこで私は、あなたに我が秘儀を授け、
その偉大なる使命のための教えを授けましょう。
エレウシスの聖域において、
天上の泉が、人類に向かって
開かれるようになるために。
その神殿は、デメテルと、
そして、手酷く奪われしペルセポネのために、
捧げられるのです。

（彼女、姿を消す。）

メタニラ（怒りに震えて立ち上がり、トリプトレモスに向かって）：

お前のせいで、私は王妃のマントを、
そして老年の誉れを失ってしまった。
ゆえに、お前を呪ってやります。
お前が私を「母親」と呼ぶことを、
決して許しはしません。

（平伏していた三人の姉妹が立ち上がり、物珍しそうに兄弟へと近づく。彼女たちは彼の肩に手を置き、震える声で囁き合う。）

「ペルセポネ……、その方は、一体誰なの？」

（トリプトレモスは、デメテルが消え去ったのちも、胸の前で両手を交差させたまま、深く考え込んで立ち尽くしている。姉妹たちから問いを投げかけられると、彼は厳かに右手を高く掲げ、こう答える。）

トリプトレモス：

そのお方こそは、私たちが

救い出さねばならぬ、あの女神。
私たち自身が、
真の自由を手にするために。

■エドゥアール・シュレー
「エレウシスの聖なる劇」③
Edouard Schuré
The Sacred Drama of Eleusis

〔第二幕：冥府のペルセポネ〕

●基本的な視点

第二幕は、魂が冥府で記憶を失いかける過程と、それを引き戻す呼びかけ。
第一幕が「神が人間の家へ降りる」幕だったのに対し、
「人間が冥府の門を破って、眠る魂に名を思い出させる」幕となっている。

ペルセポネはタルタロスで夢の木に凭れ、深い眠りに落ちている。
冥府の悪霊たちは、天上の女神を得たことで、
地上の人間の過ちと美とをすべて自分たちの領域へ引きずり込める、と歓喜する。
プルトンが差し出すのは柘榴の杯、「忘却」と「盲目なる欲望」の薬。
これを飲めば光の王国への郷愁は消え、ゼウスですら絆を裂けない、と言う。
救い得るのは、彼女に呼ばれ、
デメテルの胎を通って新たに生まれてくるディオニュソスだけだ、とも告げられる。

杯を覗き込むたびに、彼女は自分の瞳、夫の炎、天上の記憶の苦痛を見る。
飲む直前、ヘカテの七匹の竜の戦車でトリプトレモスが現れる。
彼の声が母の警告を思い出させ、夢は剥がれ、
彼女は杯を投げ捨てて「ディオニュソス」と呼ぶ。
人間は魂を力ずくで連れ出すことはできない。
できるのは、忘れかけた夫の名を、再び口にさせることまで。
幕は雷鳴とともに全員が消えるところで閉じ、奪還そのものはまだ成就しない。

●要点

・冥府の勝利宣言：

悪霊の合唱は、無垢な地上の子らがこれまで容易く闇へ下っていたのに対し、
今は天上の女神を獲たので、人間の生涯の過ちも美もこの領域を満たす、と歌う。
ペルセポネの征服は、個の魂の事件であると同時に、
人類全体が影で満たされる危機として描かれる。

・眠れる女王：

神秘主義者たちが足元に花を供えても、彼女は目覚めない。
魂はすでに冥府の王座に座らされながら、なお夢の木の下にある。
供物は届かず、意識は閉じたまま。

・柘榴の杯：

プルトンは闇に捧げた果実を赤い血へ絞る。
ひとたび味わえば、かつての思考が妻を奪い返そうとする郷愁も消える。
契約は味覚によって完成する、という設定。

・三度の凝視：

一度目は欲望と苦悶の芽、
二度目は杯の底に映る自分の瞳と夫の炎、
三度目に渇きが彼女自身を捉える。
記憶は慰めではなく「恐るべき苦悶」として感じられ、
それゆえ忘れたい衝動が生まれる。
影たちは「飲むな、エリシオンへ導け」と乞い、
悪霊たちは「忘れよ、生命の力を我らに回せ」と迫る。

・プルトンの変貌：

杯に酩酊すると、漆黒の王が美しきアドナイの姿に見える。
喪失した夫と、捕らえた者が、欲望の中で一時重なる。
これが忘却の薬の働きである。

・突入：

ヘカテが御し、トリプトレモスが突き棒を携えて現れる。
デメテルの炎による浄化とヘカテの案内によって、
彼は雷霆も通用しない不死身の身となっている。
プルトンはヘカテを魔女・誘惑者と呪うが、
彼女はデメテルの命を果たすだけだと答える。

・人間にできること：

トリプトレモスは「その杯から飲むな、母の警告を思い出せ」と叫ぶ。
ペルセポネは彼の姿に春の大地、母、天の輝き、忘れかけた夫を思い出す。
しかし門を破り、彼女を連れ去れるのは、
母の胎内ですでに一つだったディオニュソスだけだと彼女自身が言う。

・名を呼ぶ：

杯は地面に捨てられ、「ディオニュソスよ」という呼びかけが響く。
ティタンに引き裂かれても、その思考は
ゼウスの魂の内に生きている、と彼女は知る。
救いの条件は、力ではなく、名の回復である。

・未完の幕：

プルトンはトリプトレモスに永遠の拘束を宣告するが、
雷鳴とともに一同は消える。

奪還も、杯の完飲も、この幕では決着しない。
残るのは、魂がもう一度夫の名を呼べた、という事実だけ。

※第二幕の到達点は解放ではなく、忘却の直前での呼び返し。
人間の英雄は冥府へ入れる。
しかし魂を光へ還すのは、彼女が自ら呼ぶ霊（ディオニュソス）の側に残されている。

●本文

（舞台はタルタロス、プルトンの神殿の内部。右手の薄暗がりのなかに、「夢の木」に遮られるようにして王座が据えられている。その生い茂る葉の合間には、レムレス（亡霊）、ハルピュイア（怪鳥）、ゴルゴンといった異形の怪物たちの姿がうっすらと見え隠れしている。）

第1場

（プルトンが笏を手に、王座の傍らに座している。王座ではペルセポネが、夢の木の幹に頭を預けたまま、深い眠りに落ちている。神秘主義者たちが、死者の女王（ペルセポネ）の足元へ、音もなく花々の供物を捧げてゆく。しかし、深い眠りにある彼女が目覚める気配はない。）

タルタロスの見えざる悪霊（デーモン）たちの合唱：

ペルセポネの征服者、大いなるプルトン、
彼に栄光あれ！
地獄は歓喜に沸き立っている、
お前の婚礼の宴に。
千もの喜びの篝火（かがりび）に、
タルタロスは眩く輝く。

今日（こんにち）にいたるまで、
地上の子供たちは、
その無垢さゆえに、
あの御方の手を逃れてきた。
彼らはあまりに容易く、
暗闇の領域へと下っていた。
けれど今、高き天上の女神を
我がものとしたことで、
数知れぬ数の人間を、
私たちは己の元へと征服するのだ。
なぜなら彼らは、
その生涯の過ちを、
そしてその美しい姿を、
我が領域へと引きずり込むからだ。

ここを、空虚な影たちで、
満たさねばならぬ。

ステュクスの者どもよ、ハルピュイアよ、
怪物どもよ、「偽りの木」の元で歓喜せよ。
プルトンに栄光あれ！
地獄は喜びに震え、
その獲物を
がっしりと掴んで離さない、
この暗きタルタロスよ。

プルトン（漆黒の聖杯を手にし、眠れるペルセポネを見つめながら）：

まどろみの中にある天の娘は、
なんと美しく見えることか！
お前は我が領域へと受け入れられたのだ、
天上の愛おしい娘よ、
神々のまばゆき花よ。
これからのち、
不死なる神々のうち誰一人として、
二度とお前の姿を見ることは叶わぬ。

お前が永遠に
私の元から失われぬように。
「忘却」と「盲目なる欲望」の不（薬）を、
私はお前に与えねばならぬ。
この杯の中で押し潰され、
赤い血へと変わる、
闇に捧げられしこの果実を。
（彼は杯の中に柘榴の汁を絞り出す。）
そうすれば、お前の魂の内で
記憶は色褪せてゆく。
そして、かつてのお前の思考が
いまも生き長らえ、私から妻を
奪い去ろうとするかもしれない、
あの光の王国への郷愁も消え去るのだ。

ひとたびお前が
この果実を味わったなら、
ゼウスとて、
お前を縛るこの力を引き裂くことはできまい。
神々の父（ゼウス）ご自身の力をもってしても、
新たなるディオニュソスを創り出し、
お前を連れ戻すことは、お前の夫（ディオニュソス）にしか
できぬこと。それも、お前に呼ばれた彼が、
デメテルの胎内を通じて
新たなる生命へと生まれ変わって来ぬ限りはな。

ペルセポネ（目覚めながら）：

私は、どこにいるの？
おぉ、支配者の腕に抱かれた、
この悍ましくも重苦しい眠りは。
あの腕が、私を恐ろしく捉えている！
私は、どうなってしまったの？
不吉なる、暗黒の領域の女王に
なってしまったというの！
夜が私を取り囲み、それは決して終わることがない。

影の民の群れ……、
そして恐ろしい怪物たちが、
私を監視している……。
夢から、そして偽りの力から
織りなされた幻影たちが、
私を惑わせようとしている！

影たちの合唱：

あなた様が私たちの中に見るものは、ただの魂。
禍いの力に打ちひしがれ、
この岸辺を彷徨う魂なのです。
私たちは救済を乞い願います、おお、女王よ。
あなた様の手で、私たちを
あのエリシオンの平原へと
導き上げてくださることを、伏してお願い申し上げます。

ペルセポネ：

あなた方の中に、私は見出さねばならないのね、
我が兄弟、我が姉妹たちの姿を。
けれど、この深淵からあなた方を
救い出す力など、私にはない。
この暗き領域に囚われていると感じているのは、
この私自身なのだから。
あなた方の呻きが耳に響き、
その涙が、私の心へと伝わってくる。
あたかも、遥か高きところからの記憶のように。
けれど、私にできるのは、ただ
私のために泣いてほしいと願うことだけ。
私が、あなた方の為に泣いているように！
私たちの魂にとって、
この場所では、それ以上のものは何も与えられない。

プルトン：

面（おもて）を上げよ、
プルトンの妻よ、
死者の女王よ！
この広大なる宇宙のどこを探しても、
お前の王国ほど美しい場所は存在せぬ！
私は宇宙において崇められ、
地上において恐れられている。
我が祭壇の上には、
生贄の血が、幾筋もの川となって流れ落ちる。
それと全く同じ栄誉が、
お前の上にも授けられるのだ。

（ペルセポネ、両手で顔を覆う。）

お前の足元を見るが良い、
オリンピアの神々の
聖なる祭壇におけるそれよりも、
はるかに激しい情熱を燃やし、
死者たちが押し寄せている。
彼らの嘆願を見よ！
お前がここで我がものと呼ぶその力は、
あの傲慢なデメテルが
持つ力よりも、はるかに強大なものとして現れるはずだ。

お前は、ひざまずく者たちへ
永遠の住処を割り当てるのだ！
さあ、この不（薬）を飲むが良い！
それはお前の理性を開き、
この領域の、崇高なる喜びに
目覚めさせるだろう。
そして、この私が
お前に捧げる愛にも。

（彼はペルセポネに杯を差し出す。彼女は受け取るのを躊躇うが、最後には好奇心と恐怖の入り混じった面持ちで、それを掴み取る。その瞬間、「夢の木」から、ステュクスの生き物やスフィンクス、ハルピュイアたちが、妖しげな光を放ち始める。彼らは目を大きく見開き、その爪を突き出してくる。）

ペルセポネ：

おぉ、奇妙な杯よ！
手にするだけで、私の手が震える……。
その赤い汁の内に、
恐るべき欲望が
感じられるというのに……。
その内側で、火花が散っている。
まるで、悪の内に根を張る

知恵のように。
あの謎めいた果実の種子……。
見るも悍ましい種子のように、
果てなき苦悶の芽（スプラウト）が湧き上がってくる！

私は飲まない！……
けれど、この杯が
私の手に吸い付いているように感じられる……。
そして、ひとたびこの黒い噴火口（クレーター）を
覗き込んでしまったなら、
何度も、何度も、
その眼差しを繰り返さずにはいられない！

（彼女は、二度目の視線を杯の中へと注ぐ。）

なんと奇妙なことでしょう。今度は、私自身の姿が
そこに映し出されているわ！
暗い炎の内に、
私自身の瞳が、私を見つめ返している。
あれは、私の夫の
瞳から放たれ、
私を恐ろしく照らし出していた、あの炎。
それが、私の血管の中で燃え盛っている。
まるで、恐ろしい矢が
この胸を刺し貫いたかのように！

こうして、高きところの記憶は、
魂にとっての恐るべき苦痛として感じられるのね。
私は、あの時間を思い出さねばならない。
天上の母上の
膝の上で、私が
遊んでいたあの時を。そして、
処女でありながらも、夫（ディオニュソス）が
私と結ばれていた、あの時を。

けれど、この苦難の時刻にあって、
彼の名前も、そのお姿も、
今の私には分からない。
数々の夢が、私を満たしているというの？
あぁ、禍いなるかな、災いなるかな。
私はもう二度と、
あの高みへと昇ることは
叶わなくなってしまったのだわ！
では、私はすべてを忘れてしまうの？

影たちの合唱：

飲んではなりません、ペルセポネ！
その黒い聖杯の中の、
赤い血を。
そして、私たちを
ヘカテの暗闇から、
あのエリシオンの領域へと昇らせてください。

悪霊（デーモン）たちの合唱：

忘れろ、忘れてしまうのだ。
お前はその杯から
飲み干さねばならぬ。
そして、それを私たちに回し、
飲ませるのだ。
生命の力を飲み干すことを、

私たちは
この聖杯に渇望している！
私たちの内側で燃え盛っているのは、
地獄の渇き。
それを癒やせるのは、
ただ、あの御方（プルトン）だけなのだから。

ペルセポネ：

私自身も、今この瞬間に、
渇きを感じている！
おぉ、記憶という名の
この恐るべき苦悶よ……。
薄れゆく希望が、
私の内なる存在を掻き乱す。
あぁ、この希望の炎が、もう一度だけ
燃え上がってくれますように！
それが叶わぬというのなら、
永遠にかき消してしまうが良い！

（彼女は三度、杯の中を覗き込む。）

プルトン：

呪縛は完成しつつある！
あの女が薬を口にするぞ。

ペルセポネ（プルトンの方を振り向いて）：

これは幻影だ、抗う力など私にはない！
未知の陶酔が、私を圧倒してゆく！
王よ、あなたの色彩が変わり、
その瞳はいっそう眩く輝きを増してゆく……。
その王冠は、まばゆい栄光を放っているわ！
あなたの黒髪のなかに、青き星々が現れる！
あの漆黒のプルトンの恐るべき姿が、
美しきアドナイ（主）の姿へと変容してゆく……。
では、私の夫は、失われてなどいなかったの？
混乱し、眼前のあなたのお姿に酩酊して、
私にはとても信じられない。あの御方が、これほどまでに
恐ろしく、同時に美しい存在であったなどとは。
いま私の前に、これほどまでに光輝いて立っておられる！

プルトン：

ゼウスによって、処女（おまえ）の永遠の夫として
与えられた者、それこそがこの私だ。
死者の女王へと姿を変えよ。
お前がその不を飲み干すとき、全地獄が
私たちとともに、この婚礼の喜びを享受するのだ。
オリンピアの神々どもは、ことごとく青ざめるが良い！

（ペルセポネは目を閉じ、杯を唇へと近づける。その瞬間、シンバルの金属音を伴った地鳴りのような雷鳴が轟く。闇のなから、七匹の竜に引かれた戦車が姿を現す。御者はヘカテ。その右隣にトリプトレモスが座している。彼は右手に、槍のごとく突き棒を携えている。）

第2場

一同。ヘカテ、トリプトレモスが入場。

プルトン（立ち上がり、威嚇するように笏を振るいながら）：

我が命もなく、この地獄の門を
破って入る不届き者は誰だ！
生身の人間でありながら、そのような大それた真似をするならば、
容赦なく打ち砕いてくれよう。

ヘカテ：

プルトンよ、お前はトリプトレモスには無力だ！
デメテルがあの者を炎で清め、
この私が、あの者をここへと案内したのだから。
いかに強大なる雷霆（いかずち）とて、あの者には通用せぬ。
この若者は、傷一つ負わぬ身（不死身）なのだ。

プルトン：

おのれ、忌まわしい女め、よくもそのような真似を！
セイレンの顔をした、恥知らずの密偵め！
罰として、お前が神々と人間を欺くために
被っている、その微笑みの仮面を枯れ果てさせてやろう。
お前は地上の恐怖の象徴となるが良い！
お前の名は魔女、そして誘惑者と呼ばれるのだ！
お前の額に、あのレムレス（亡霊）どもが刻むような
深い皺を刻み込んでくれよう！

ヘカテ：

私は、大いなる女神（デメテル）から授かった
お命じを果たしたいだけ。
だが聞くが良い、死者の神よ、今こそ耳を傾けよ。
生きた人間の声が、何と語るかを。

トリプトレモス：
おやめなさい、ペルセポネ！ その不吉な
杯から飲んではなりません！
母上の警告を思い出すのです。

ペルセポネ（混乱し、悪夢から目覚めたかのように）：

若きお方、死すべき定めの人間でありながら、
神々のごとき大胆さと勇気に満ちたあなたは、一体誰なのです？

トリプトレモス：

私はエレウシス王の息子。
大いなる女神デメテルに守られ、
この頭に王冠を戴くはずだった男です。
あなたをその恐るべき束縛から解き放つために、
私は、手にするはずだった確かなものをすべて投げ打ってきたのです。

ペルセポネ：

おぉ、若く、恐れを知らぬ青年（エフェボス）よ！
あなたの姿を目にした瞬間、私の魂から忌まわしく湧き上がっていた
あの夢が、毟（むし）り取られてゆく。
あなたは私に、あの春の息吹に満ちた大地を、
我が母上を、ウラヌス（天）の輝きを思い出させてくれた。
そして、この夜と恐怖に満ちた世界の中で、
私が忘れかけていた、あの夫の存在を。

長きにわたり枯れ果てていた泉が、
再び瑞々しく湧き出でるかのように、
天上の声が、いま私の心の中で囁いている。

トリプトレモス：

さあ、この戦車に飛び乗り、私に続くのです。

ペルセポネ：

この領域の門を打ち破ることは、
あなたには許されていません！ 私を連れ去ること、
それは神が神に対してのみ、成し遂げられること。
母上の胎内において、
すでに私と一つに結ばれていた、あの御方にしか！
巨神（ティタン）たちが、私の愛する者を私から引き裂いた。
けれどあの御方は、いまも私の思考の中に生き続けている。
ゼウスが、その魂の内に隠し持たれているあの思考の中に。
私を救えるのは、ただあの御方だけ。
私はあなたを呼び求めます、ディオニュソスよ、ディオニュソス！

（彼女はプルトンの杯を地面へと投げ捨てる。）

プルトン：

トリプトレモスに死罪を宣告する！
あの者を、永遠に地獄へと縛り付けよ。

（再び激しい雷鳴が轟く。プルトン、ペルセポネ、ヘカテ、トリプトレモス、一瞬にして姿を消す。）

■エドゥアール・シュレー
「エレウシスの聖なる劇」④
Edouard Schuré
The Sacred Drama of Eleusis
（GA 42　劇化作品集 I
エドゥアール・シュレー戯曲集 1909年）

エドゥアール・シュレー再構成
ルドルフ・シュタイナー自由律（自由な韻律）化
全三幕の劇
マリー・フォン・ジーフェルス公認翻訳に基づく

〔第三幕：オリンポスの高嶺〕

●基本的な視点

第三幕は、奪還の条件が「力」ではなく
「新たに生まれる神」であることを、オリンポスの上で示す。
第二幕が冥府での呼びかけで終わったのに対し、
その呼びかけが神々の結合を起こし、魂と霊が再会するところまで進む。

ゼウスは、時が満ち、デメテルは戻らねばならないと知っている。
しかしトリプトレモスはタルタロスで囚われ、人間の力では鎖を断てない。
ペルセポネがプルートンの秘薬を一度でも飲めば、
雷霆をもってしても戻せない。
ゼウス自身も、自分が創った世界の成り行きを消せない、と認める。
生を求めるか死を求めるかの選択は、それぞれの自由に残されているからである。

デメテルは復讐の女神のように松明を掲げて現れ、娘を兄弟へ渡した冷酷を糾す。
ゼウスは、下ったのは娘自身の好奇心であり、
解放をもたらし得るのは「新たなる神」だけだと答える。
それは彼の炎と彼女の光が結びついて生まれる「新たなるディオニュソス」。
ティタンに裂かれても敗れず、大宇宙と人類のために自らを犠牲にする者。
デメテルはさらなる血と涙を拒み、世界を壊して太古の夜へ戻すと言う。
そのとき深淵から「ディオニュソス」の声が届き、彼女は夢に落ちる。
ゼウスの思考が彼女の心へ流れ込み、夢の力が、形作られた姿に命を吹き込む。

こうして現れたディオニュソスと、
トリプトレモスの戦車で逃げてきたペルセポネが再会する。
裂かれた肉体の破片は「我が姉よ」と叫び続け、
彼女は死者の国で死ぬことさえできずに叫んでいた。
苦痛が妻を与え、憧憬が夫を自分のものにした、と二人は言う。
トリプトレモスはエレウシスへ帰り、
見た真理を未参入者に明かさぬよう命じられる。
英雄たちの合唱とヘルメスのエピローグは、これを個人の慰めであり、
同時に「起源の記憶が人間を神の子とする」秘儀として閉じられる。

●要点

・ゼウスの限界：

雷霆は人間を倒せるが、思考が行為へ移ったあとの必然は消せない。
神々も各自の領域を支配する永遠の存在であり、父神は彼らを自由に動かせない。
娘への憧憬はあっても、母が務めに力を貸さねば何もできない。

・責任の応酬：

デメテルは、ゼウスが娘を奈落へ突き落としたと責める。
ゼウスは、好奇心が略奪者を誘い出したのであり、
意志に反して奪われた獲物を取り上げられなかったと返す。
自由な娘であるがゆえに、不死のまま鎖へ落ちた、という対立。

・最初のディオニュソス：

彼はすでにタルタロスへ下ったが、ティタンに八つ裂きにされた。
父と同じく、あの姿のままでは娘を出せなかった。
デメテルは、それなら自ら冥界へ下り、松明で世界を滅ぼすと言う。

・新たなる神：

解放者は、ゼウスの炎とデメテルの光が結びつくときにのみ生まれる。
名は新たなるディオニュソス。
不死身ではないが、より強く、血と涙を流しながら敗れない。
犠牲は敗北ではなく、業そのもので。

・深淵の呼びかけ：

デメテルが太古の夜へ戻ると誓った瞬間、
ペルセポネの声が「ディオニュソス」と響く。
求められているのは母ではなく、二人が創らねばならない神。
松明は消え、彼女は恍惚の眠りに落ちる。

・夢の創造：

至福者の合唱は、豊穣の女神が夢へ魂を漂わせるとき、
創造の力が宇宙を駆け、新たなる神が産声を上げると歌う。
父が形作るものに命を吹き込むのは、母の夢の力。
死者の国に散った魂は、その光の担い手を迎えることで、
朽ちるものを不滅へ変える。

・脱出：

ペルセポネは、光の矢がタルタロスを貫いたとき、
プルートンが眠り、地獄の門がひとりでに開いたと語る。
トリプトレモスは竜の戦車を御し、彼女を最高天まで導いた。
人間の役割は、門が開いた瞬間に共に駆け抜けること。

・再会：

ディオニュソスは、裂かれた心臓と破片が「ペルセポネ」と叫び続けたと言う。
バッカスの姿での探求は、享楽ではなく苦痛しかもたらさなかった。
彼女はヘラクレス、プロメテウス、イアソンの姿の内に同じ血を認め、
今、兄弟であり夫である彼の前に立つ。
血の雫と涙の雫が、二人の苦痛の証人である。

・英雄の帰還：

ゼウスはトリプトレモスに、いかなる人間も見なかった奇跡を見たと告げ、
エレウシスへ帰って神々の教えと共に生きよ、と命じる。
真理は神聖を汚す者や未参入者に明かしてはならない。
神々の口では、彼は「ペルセポネの解放者、人の子」と呼ばれる。

・終幕：

英雄たちの合唱は、見たものを地上の記憶に守り、源泉を裏切るなと言う。
ヘルメスは観客に、生の鏡の前で変容の力を知れ、と促す。
「時の歩みのなかの起源とは、永遠の命のための、イシスの死である」。
高嶺から堕ちた人間を神の子へ形作るのは、起源の記憶。

※全劇の到達点は、娘の単純な帰還ではない。
魂が冥府で夫の名を呼び、母の夢と父の形づくる力が新たなる霊を生み、
人間がその瞬間を目撃して地上へ持ち帰る、という循環である。
秘儀は、その記憶を閉ざされた宝として保つことに置かれている。

●本文

第1場

（ゼウス、深く考えに沈みながら、王笏に寄りかかって立っている）

ゼウス：

時の循環は満ちた。デメテルは戻らねばならぬ。世界を巡る彼女の激しい彷徨も、終わりを迎えつつある。
彼女の養子であるトリプトレモスが、ペルセポネを連れ戻すためにタルタロスへと足を踏み入れたのだ。

今や、彼（トリプトレモス）自身が囚われの身となってしまった。
自ら聖なる目標と定めたことは、もはや彼には不可能となったのだ。

（苦悩をにじませて）

今、デメテルは地上を彷徨っている。
かつては、形なき光の気高き源泉であったあの母が、
復讐の女神（フュリア）へと姿を変え、松明の火を頼りに、
失われた娘を虚しく捜し求めている。
人々は彼女から退き、
その恐ろしさに満ちた眼差しに怯えているのだ。
彼女の魂は怒りに満ちている。
……それというのも、彼女には、
ペルセポネの解放者を決して創り出すことができないからだ。

（天を仰ぎ、自嘲気味に）

この私でさえ、自ら創り出した世界の運命（さだめ）には逆らえぬ！
私の雷霆（らいてい）は人間どもを打ち倒すことはできても、
生を求めるか、死を求めるか、
その選択は誰もが自由に下せるのだ。
だが、彼らの思考が一度行動へと移されてしまえば、
その後に続く必然の成り行きを、
この私でさえ消し去ることはできぬ。
そして、神々に目を転じれば、
己がいかに無力であるかが、まざまざと思い知らされる。
神々はみな、私が授けた力によって、
それぞれの領域を支配するよう定められている。
私と同じく、彼らもまた永遠の存在なのだから……。

（深く嘆息して）

そして、もしペルセポネが一度でも
プルートンの不老不死の薬を飲んでしまったなら、
私の雷霆を以てしても、彼女を取り戻すことはできぬ……。
私の魂は、何ものにも代えがたいあの娘への、
途方もない憧憬に引き裂かれている。
孤独に身を焦がし、あの娘なしでは、ただ荒涼とした寂しさを感じるばかりだ。
だが、母親が私の務めに力を貸してくれぬ限り、
私には娘のために何もしてやれぬのだ……。

（ふと手を止め、遠くを見据える）

……だが、この耳に届く、聞き慣れぬ轟音は何だ？
霊気（エーテル）が震えるのを感じる。
宇宙の深淵から、嵐が神々の山の斜面へと迫ってくる。

（激しい嵐のサージ（高波）の轟音が響き渡る）

（デメテル、両手に二本の松明を掲げて登場する）

デメテル：

おお、ゼウス！ あなたは何と残酷で、無慈悲な御方か！
いつになったら、私から奪い去るのをやめてくださるのです？
あなたは不変の栄光と権力を誇りながら、
ご自分が創り出した命あるものが苦痛に喘いでいようとも、
そして、あなたの半身であるこの私自身が、
張り裂けんばかりの苦しみに悶えていようとも、冷酷なまま。
あなたはペルセポネを奈落へと突き落とし、
あの子の望まぬままに、
あなたの兄弟であるプルートンへと引き渡したのです！

ゼウス：

それは違う。私の意志に反して、プルートンはあの子を連れ去ったのだ。
オケアノスの岸辺で、ペルセポネが無邪気に遊んでいた折、プルートンが正当に手に入れた獲物を、私は彼から奪い取ることはできなかった。
あの子自身の好奇心が、あの子を深淵へと引きずり込む力を解き放ってしまったのだ。
あの子自身が、あの略奪者を誘い出したのだ。

デメテル：

狡猾な御方。あなたはそうやって巧妙な詭弁を弄し、ご自分の残酷な行いを隠そうとする。
あの子に（冥界へ）下るよう命じたとき、あなたはすでに、あの子を破滅させるつもりだったのです。

ゼウス：

ペルセポネは、お前の心に宿る望みから生まれた、自由なる娘だ。
お前と同じく、あの子もまた不死の存在なのだ。

デメテル：

そのような不死であるくらいなら、死のほうが遥かに勝っています！
それなのに、あなたは奴隷の鎖に繋がれたあの子を救うために、何一つなさらなかった。
追放された者の自由のために戦う役目を、トリプトレモスを通じてこの私に押し付けた。
エルージスの耕作者（トリプトレモス）はペルセポネを眠りから目覚めさせた。だが今や、プルートンは二人とも鎖に繋いでいるのです！

ゼウス：

人間の力で、あの鎖を断ち切ることはできぬ。

デメテル：

それでも、あなたはあの不幸な者たちを救おうとはなさらないのですか？

ゼウス （険しい表情で）：

我が息子ディオニュソスが、あの子を救い出すためにタルタロスへ下ったではないか？

デメテル （皮肉を込めて）：

ええ、あなたの憧憬の息子、ディオニュソスね。
彼は下っていきましたが、タイタン族（巨神族）に八つ裂きにされてしまった。父親と同じく、あの息子にもあの子を救い出す力はなかったのです。
もし、あの子に自由を与える策を講じることすらできぬほど、あなたが完全に無力であるというのなら……
私は自ら冥界へ下り、この松明であなたの世界を滅ぼして見せましょう！

ゼウス：

ならば、冷静に私の言葉を聞くが良い。
解放をもたらすことができるのは、ただ「新たなる神」のみだ。

デメテル：

できるというのなら、その神の名を挙げなさい！

ゼウス：

私の炎から湧き出る力が、お前の光から輝くもう一つの力と結びつく時……解放をもたらすことのできる神が創り出されるのだ。

デメテル：

では、その神にはいかなる名がふさわしいというのです？

ゼウス：

「新たなるディオニュソス」。精神において、すでに私の憧れの夢の中に生きている存在だ。

デメテル：

最初の息子と同じように、また二人の目の息子を、あの荒ぶるタイタン族に八つ裂きにさせるというのですか？

ゼウス：

タイタン族とて、彼に対しては無力だ！
タイタン族は不死身ではないが、より強き存在となる。
大宇宙のため、神々，そして人類のために、自らを犠牲にするのだ。

勝利の雄叫びを上げながら、その大いなる業（わざ）のために血と涙を流すだろう。
誰の庇護を受けずとも、彼が敗れることはない。たとえ敵の武器が彼の鎧を打ち砕き、彼をバラバラに引き裂こうとも。

デメテル：

これ以上、さらなる涙を、さらなる血を流せというのですか？
私はそのようなことは望みません。私は誓いましょう、
常に新たな波となって湧き出る、我が存在の清らかな光に懸けて。
新たな世界が生まれるくらいなら、私はあなたの創り出したこの世界を破壊してみせる！
いっそ、かつて全ての生命が至福のうちに囚われていた、あの太古の夜の眠りへと戻るほうがマシなのですから……！

（そのとき、深淵から木霊する苦悶の叫び声が聞こえる。デメテルは二本の松明を落とし、松明は地面でかき消えるように消灯する）

ゼウス：

深淵からの声を聞くが良い！
彼女の叫びは、デメテル、お前に向けられている。
深淵からの声
おお、ディオニュソス！ ディオニュソスよ！

デメテル （喜びに驚き呆気にとられて）：

ペルセポネの声……！

ゼウス：

聞こえたか？ 今こそ己の目で確かめるが良い。
あの子が求めているのは、お前ではない。
あの子が渇望し、そして我らが創り出さねばならぬのは、私が焦がれ求めるあの神なのだ。

デメテル （両手をこめかみに当て、恍惚のなかに佇む）：

何という凄まじき夢が、私を喜びで満たすのでしょう！
何という穏やかな眠りが、私を包み込んでゆくのか……。
胸を焦がす激しい渇きが、消え去っていくのを感じる……。
世界の調和が、再び我が魂の中に鳴り響き、
大宇宙のあらゆる方角から、至福の光が私へと降り注ぐ……。
白い馬たちが見える……誇り高き英雄たち……
そして、純潔の炎の中に輝く女たち……。
そして遥か深淵の彼方に、あなたの栄光が！
あの若き神は、何と優しく、そして何と激しく燃え盛るように輝いているのでしょう！ おお、私のディオニュソス！
おお、永遠の夜を明かす者よ、夢よ……。

（デメテルは目を閉じ、岩の上へとゆっくりと崩れ落ちる）

ゼウス （その場から動かずに）：

至高の魔術が彼女を圧倒した。
我が王笏から流れ出す眠りが効力を発揮し、
私の思考が、彼女の心へと流れ込んでゆく。

（地面から雲が立ち上る。デメテルの頭の背後に光が現れる。ゼウスは、雲から形を創り出すかのように王笏を動かす）

見えざる至福者たちの合唱：

地上のあらゆる豊穣の女神が
夢の中へと魂を漂わせる時、
創造の力が大宇宙を駆け巡り、
神々の熱情が世界に息を吹き込み、
人間どもは魂の底から震えおののく。
万物は感覚の薄明（たそがれ）から這い出で、
新たなる神々が産声を上げる。

聖なる霊魂の力が顕現せし時、
人類は畏敬の念を以て頭（こうべ）を垂れるが良い。
神々の眼差しが
果てしなき空間の領域へと向けられる時、
無数の姿が生命（いのち）となって流れ出す。
世界は虚無から生へと芽吹き、
生から虚無へと沈みゆく。
かくして神々の季節は創り出される、
人間にとっての光と闇の如くに。

だが、深淵の種子たる者たち、
死者の国に散り散りとなった魂たちよ。
これまでお前たちに欠けていた統御の力は、
今や、お前たち自身の手に委ねられる。
かつてお前たちがそこから生まれた火の炉（へっつい）は、
これまでお前たちの魂から隠されていた……

だが、今やそれはお前たちに明かされる。
神々の父が形作るものに命を吹き込むのは、
神々の母の、夢の力なのだ。
そして、命を吹き込まれた姿から、
新たなる神、強き光の担い手が立ち上がる。
お前たちはその神を己の魂に迎え入れるが良い、
彼の力によって、

お前たちの中の朽ちゆくものが、不滅の存在へと変貌を遂げるために。

第2場

（トリプトレモス、ペルセポネ、のちにディオニュソス。— 最後にゼウスとデメテル。ヘカテの戦車が現れ、トリプトレモスが手綱を握っている。彼の傍らにはペルセポネがいる）

ペルセポネ：

おお、エルージスに生まれしトリプトレモスよ！
誇り高き耕作者よ、お前がかつて故郷の土の上で
荒ぶる馬たちの炎を飼い慣らしたように、
今、この竜たちを宥（なだ）めるが良い。その巨体なる力は
岩をも砕き、果てしない疾風の速さで
霊気（エーテル）を駆け抜ける。

終わりのない空間を抜けて私を導き、
私たちは無事にこの目的地へとたどり着いた。
それは、一本の光の矢が
タルタロスの暗き深淵を貫いた、あの日のこと。
私は、普段なら厳重に監視している
憐れなプルートンの目を盗み、逃げ出すことができた。
まさにその瞬間、
冥府の王に深い眠りが襲いかかり、
私はお前の戦車へと飛び乗ることができたのだ。
地獄の門は、
私たちが駆け抜けると同時に、ひとりでに開け放たれた。
私たちの旅は、最高天（エムピリアン）を突き抜けていった——

そうして何百年を旅してきたのか、
私には計り知ることもできない。
ヘリオスの光は完全に消え去り、
ただ星々の輝きだけが、私たちの行く手を照らしていた。
だが、ここはどこ？ この神聖な香りは何かしら？
オリンポスの故郷が再び目に入る、
高嶺からは、眩いばかりの光が立ち上り……
雲は渦巻いて形を成していく、
まるで炎から生まれた薔薇のように。
私の目は、この奇跡にすっかり心を奪われてしまっている。

トリプトレモス：

ご覧なさい、
気高き女神よ、目を向けるのです。

これこそが、あなたが心から渇望された御方に違いありません。
（ゼウスが形作った雲の姿のなかに、ディオニュソスが現れる）

ペルセポネ：

おお、神々の国より来たりし我が兄弟よ、
あなたは何と悲しく、そして美しく見えることでしょう！
あなたを迎える我が心は震え、
そのお傍に寄れば、畏怖の念に満たされます！

ディオニュソス：

ペルセポネ、おお、愛しきひとよ！
ついに、呪われし冥府の国から這い上がってきたのだね！
永きにわたる苦難の歳月、お前は生ける夢の面影の如く、
私の前に佇んでいた。
決して色褪せることのない、輝かしい美の幻影。
決して死ぬことのない、若さのなかに輝く姿。
婚礼のヴェールをまとい、水仙の冠を戴いて、
今、これほどまでに壮麗にお前はその姿を現してくれた。

ペルセポネ：

ああ、悲しいかな、私はあの水仙を摘まねばならなかったのです！
あの欲望の花が、漆黒のプルートンに、
私の五感を支配する力を与えてしまった。
暗き深淵のなかで私は己を見失い、
幾多の苦い涙を流しました。
呪われ、不幸の重荷に喘ぎながら。

ディオニュソス：

そして私は、姉への燃えるような憧憬に突き動かされ、
休むことなくお前の足跡を追い求めた！
私はタイタン族の狂気の犠牲となり、
彼らは私の肉体をバラバラに引き裂き、
飢えた虎どもの餌食として投げ与えたのだ。
だが、私の頭（こうべ）は深淵の奈落へと呑み込まれていった。
それでも彼らは、私の心臓と、
飛び散った肉体の破片を忘れることはできなかった。
それらは絶え間なく叫んでいたのだ。「ペルセポネ！」と。

ペルセポネ：

ですが、私はその悲痛な叫びを聞き届けることができませんでした。
恐ろしい夢の夜に汚され、

暗きプルートンの鎖に繋がれ、
死者の国へと追放され、私自身も死に果てていたのですから。

ディオニュソス：

おお、我が魂は、瑞々しき生命と
再生への渇きに、何と激しく燃えていることか！
創り出されたあらゆる生命のなかに、
お前を捜し求めようとする衝動を、何ものも消し去ることはできなかった。
私はバッカスの好色な姿へと身を変え、
恋焦がれたお前を、必死に捜し求めた。

バッカスにとって、生とは果てしない享楽であるはずだった。
だが、彼は他者にも己にも、ただ苦痛をもたらすのみだったのだ。
彼から放たれた眼差しに射すくめられ、
死は、軽やかな快楽の精霊たちを捕らえた。
そのような殺戮の数々も、私にとってはただの夢に過ぎなかった。
私は生き、そして千々に引き裂かれた。
何度新しく生まれ変わろうとも、
その一部は、また何百万もの破片へと砕け散ったのだ。

ペルセポネ：

おお、我が魂は、愛と、
そして至福なる死の犠牲（いけにえ）への渇きに、何と激しく燃えていることでしょう！
プルートンの腕のなかで、私は苦痛に身を悶え、
私の大いなる叫びは、救済を乞い求めました。
目に見えるものは、亡霊と影ばかり。
死ぬことさえ私には叶わなかった……だからこそ、私は叫んだのです！

ディオニュソス：

私はその叫びによって目覚め、ここへ来たのだ。

ペルセポネ：

人類を導くために、雷霆の口づけによって選ばれた
英雄たちの姿を借りて。
彼らはあなたと同じ血を引き、あなたと同じ本質を持つ者たち。
ヘラクレス、プロメテウス、そしてイアソンの姿となって。

ディオニュソス：

私の本質は彼らの血の中に流れ、
私の命は彼らの英雄的な肉体の中で戦い、
私の声は彼らの言葉となって響き渡った。

お前はどこにいても私に気づくはずだった。
お前は歓喜のなかで、そして苦痛のなかで、私を呼び叫んだのだ。
プルートンがお前のために鍛え上げたあの鎖は、
お前の力では断ち切ることができなかった。
だからこそ、今、私自身がお前の解放者となろう！

ペルセポネ：

あなたは私に、ご自分の光の一条を送り届けてくださいました。
それが、私を深淵の底から引き上げてくれたのです。
今、私はあなたの前に立っています、我が兄弟、我が夫よ。
私の憧憬を通じて、あなたは私のものとなりました。

ディオニュソス：

私の苦痛が、お前を私の妻として与えてくれたのだ。

ペルセポネ：

あなたの黒髪には蔦の花が咲き、
その身には、赤い果実が見えますが……？

ディオニュソス：

これは、私自身の血の雫だ。
お前を悼み、私が流した血なのだ。
そして、お前の瞳にも雫が煌めいているが……？

ペルセポネ：
これは、ペルセポネの苦痛の証人でございます。

ディオニュソス：

おお、天上の輝かしき我が子よ、お前は何と美しいのだ！

ペルセポネ：

おお、炎の力の息子よ、あなたは何と美しいことでしょう！

ディオニュソス：

世界の始まりの時から、私はお前のものだった！

ペルセポネ：

世界の終わりの時まで、私たちは一つです！

（デメテルとゼウスが姿を現す）

ゼウス：

我がトリプトレモスよ！ お前は見事に成し遂げた、
かつていかなる人間も目にしたことのない奇跡を目撃したのだ。
故郷のエルージスへと戻り、
かの地で神々（の教え）と共に生きるが良い。
お前は、この真理の光を、
神聖さを汚す者や、秘儀を授かっていない未参入者に明かしてはならぬ。
偉大なるデメテルの息子は、
人間の間で崇め奉られるであろう！
だが、神々と英雄たちの口にあっては――
「ペルセポネの解放者、人の子」と呼ばれるのだ！

（トリプトレモスの戦車が降下していき、神々は姿を消す）

見えざる英雄たちの合唱：

深く秘められた知識の目撃者たちよ！
世界の最も深き底に眠るものは、
お前たちの預言者（見者）の眼差しの前に暴かれた。
霊魂は、己が見たものを留め置かねばならぬ。
地上の領域において、それを記憶のなかに守り伝えるが良い……。
それはお前たちが生きる限り、大いなる慰めとなるであろう！
それを霊的世界への道標として、
お前たちの心の奥底に、秘密の宝として抱くが良い！

この聖所は、固く閉ざされていなければならぬ。
岩のなかに眠る、一粒の宝石の如くに。
知恵の純粋き光を世界へと運ぶことこそ、
預言者（見者）に課せられた高き義務。
だが、その源泉がどこにあるかを裏切る者は、
ただそれを失うことを望む者だけであろう。

エピローグ

（ヘルメス、その場にいる人々（観客）に向かって）

ヘルメス：

生命（いのち）の秘儀を追い求める探求者たちよ。
今こそ、暗闇から自らを解き放ち、
目覚め（意識）を獲得する時である。
存在のなかに働きかける大いなる力を、

魂と精神の変容させる力を、知るが良い。
お前たちの目の前に掲げられた、生の鏡のなかに。
往古の預言者（見者）の言葉を思い起こせ。

「時の歩みのなかの起源とは、
永遠の命のための、イシスの死である」

神々の高嶺から、人間は堕ちていった、
地上の過ちと、地上の幻惑のなかへと。
だが、己の起源の記憶こそが、
人間にあらゆる真理の本質を授け、
時の存在のなかにあって、その地上の肉体のまま、
彼を「神の子」へと形作るのである。